都名所圖會

後玄武

再刻

6

都名所圖會巻之六目録

後元武

菩提瀧
紫野大徳寺
義経誕生水
今宮御旅
清和院
引接寺
北野天満宮
大閤茶湯旧地
金閣寺
芙容池
双岡
御室仁和寺
印金堂
三宝寺
梅畑善妙寺
清瀧川

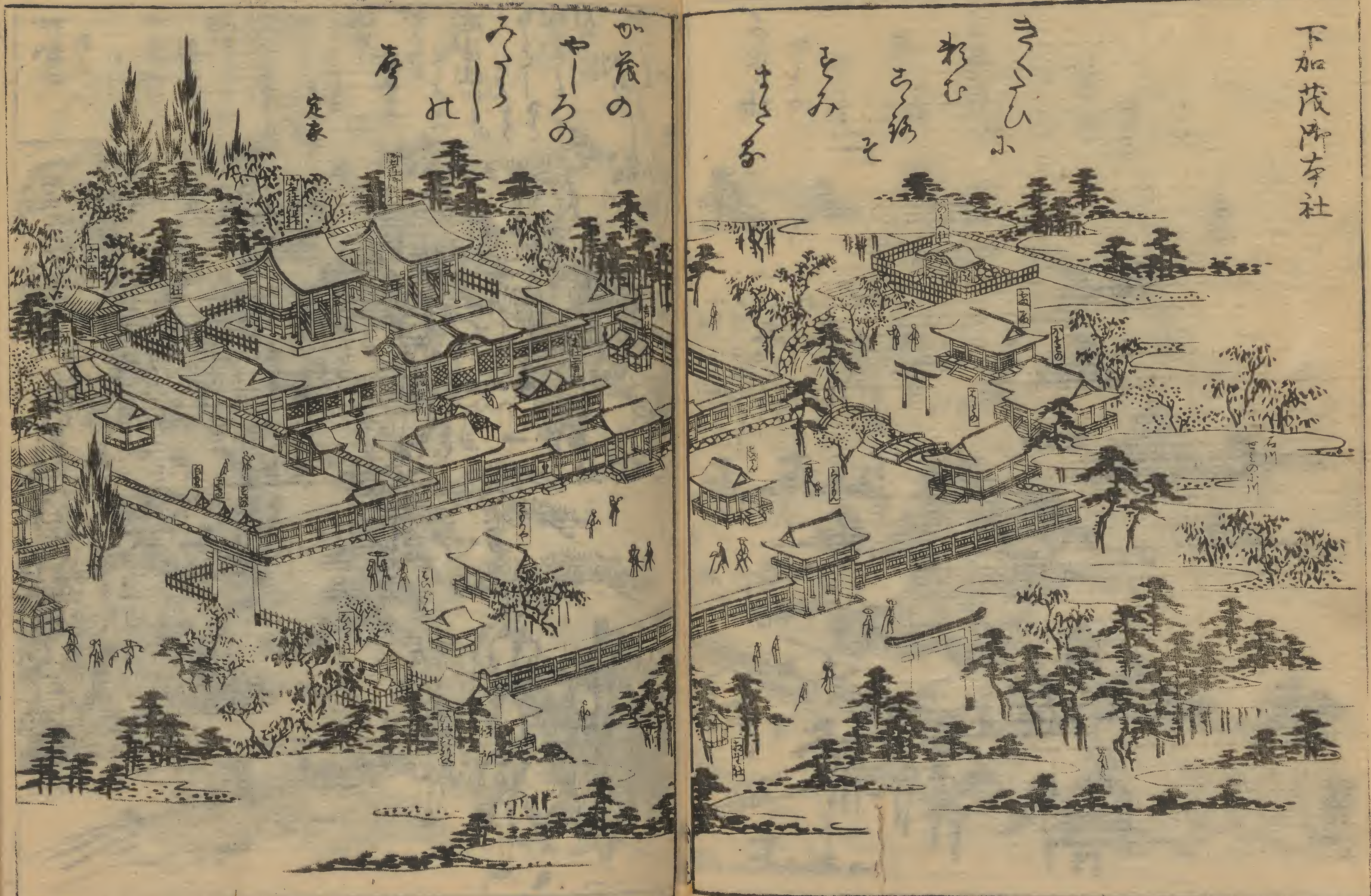
岩屋山
今宮社
舟岡山
金山天王寺
立本寺
轉法輪寺
内野遊女町
願成就寺
衣笠山
龍安寺 鴛鴦
兼好古跡
花盛圖
泉谷法藏寺
五智如来
栂尾専山寺
地藏院 紅葉名所

小野道風社
やすらい祭
雲林院
紅梅殿
焔魔堂
七本松
東向観音
平野社
鏡石
真如寺
法金剛院
大内山
西壽寺
宅魔塚
槙尾西明寺

冠石
常盤前古跡
蓮臺寺
七の社
釋迦堂
芝居
影向松
紙屋川
等持院
妙心寺
西光菴
鳴瀧妙光寺
般若寺
平岡八幡宮
高雄神護寺


楢の小川は
御手洗川の
一名なり
奈良社の
うしろは
隣て細川と
新勅撰
風そよく
ならの
小川の
夕暮は
みそきそ
夏の
しるし
なりける
家隆


下加茂河合社
高野川
糺川原
経所
河合社
御供所
千早振かものやしろの姫小松よろつ代ふとも色はかはらし
敏行


下加茂御本社
加茂の
やしろの
定家

葵のまつりハ四月中の酉の日なり人皇三十代欽明天皇の御宇よりはじまる此日ハ奉幣使御くわんくらうど近衛使かものてんそうちよくしなど内裏より祭礼の式ありて御くるまハけんのすけまでひげく其外あまたの行列ぎやうぎうなり

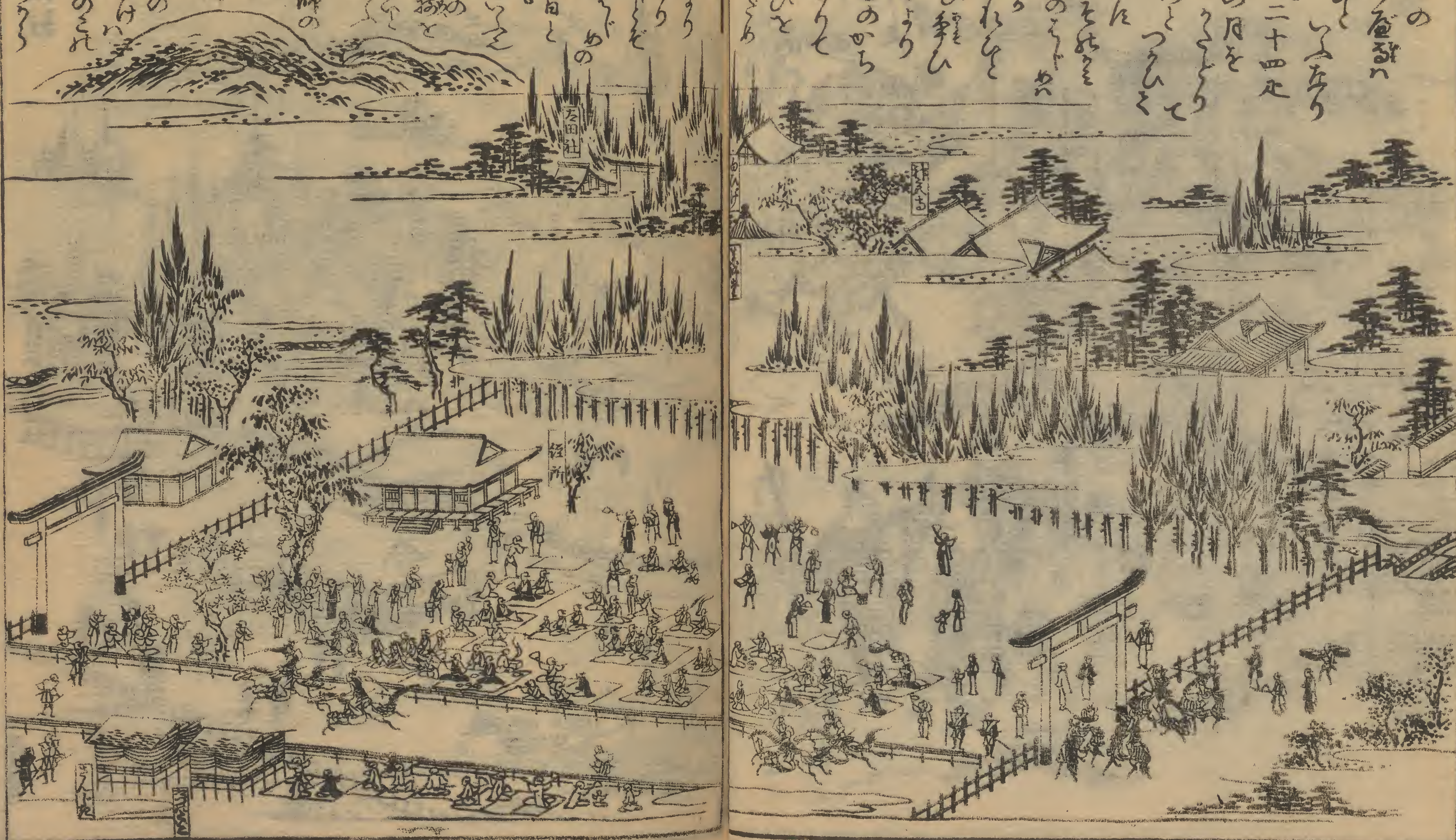
風雅
とわりぐ
まさ二葉の
あふひを神そ
いくたび
へぬる
ものの
しるしる

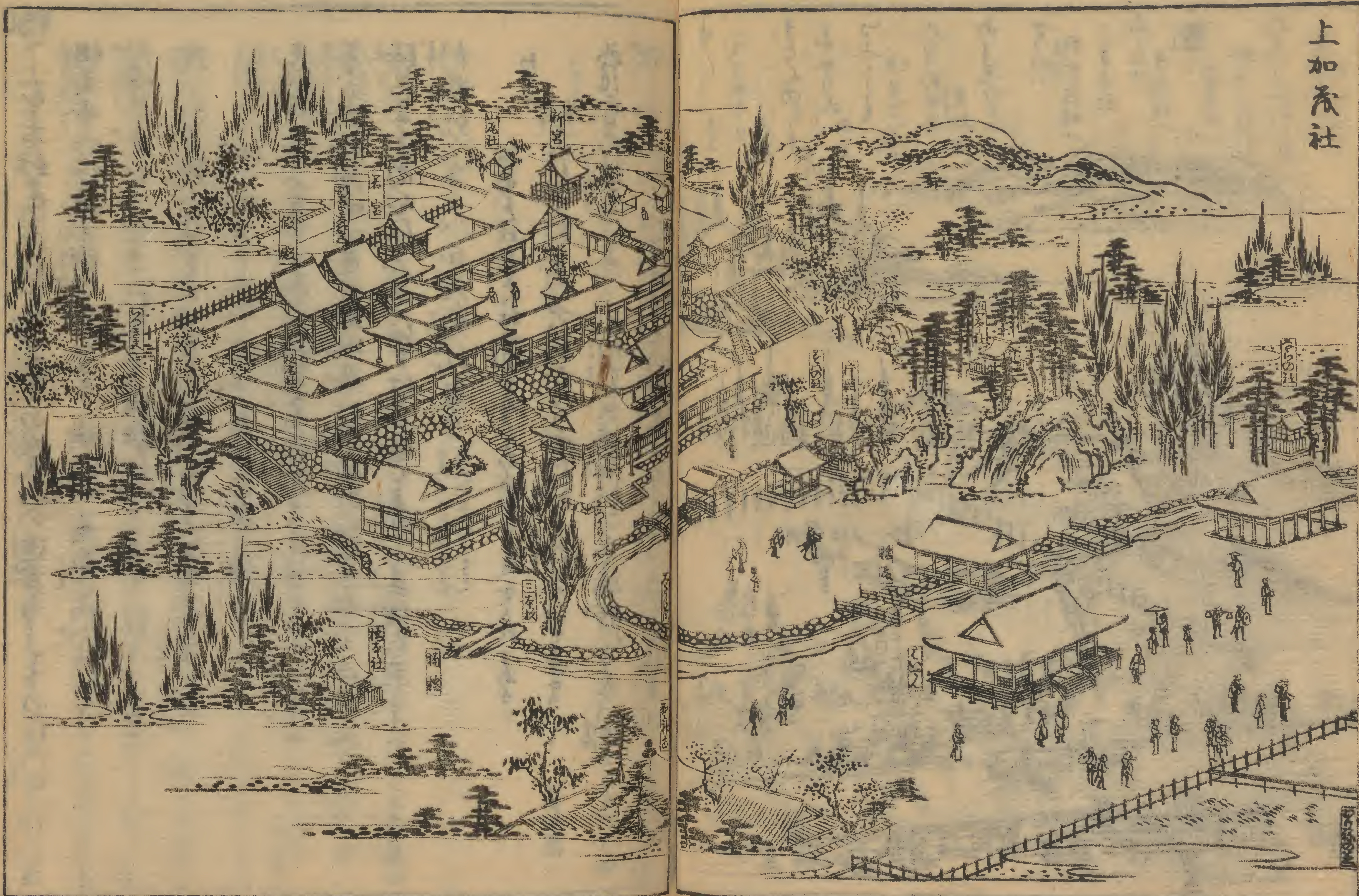
後一條前
関白



又月又日の
くらべ馬は
まてつがひと　いふ左右
むま卯ど　二十四疋
一と番の月を　うちより
赤とくろと　つがひて
はせらるゝ　それを
競馬のはじめ
とまる　ところ
あれを
御くらひ手ひ
あらしより
はけいるのがち
まけかよりて
御くらひを
さとる

すひしより
るす地くり　しるぞ
まらんのそでめの
金押りの日と
いふなるも
此日とらるゝ
又月別日の　足揃を
あるそつかひて
さられい
後法師の
ふかれ
らちの
うちには
競馬
左までの
からまけいは
あれり地のされ
むらか
うけつかう





上加茂社

鴨下上皇大神宮の御社ハ天武天皇白鳳六年の造営にして下の社ハ御祖の神とて加茂
健角命の御娘玉依姫にてましし由にや或時瀬見の小川にあそび給ひぬるに
丹塗の矢流れ来りしを拾ひ取て床に挿しおきしに遂に孕みて男子
生まれ給ひ終に御子のうまれけるに一日里人をあつめ宴饗して其男子
にあたへ汝が父とおもはん人に是をすゝめよといひ給へば盃を屋宇にさゝげつゝ神となりてそれ
天に昇り給ふ是を上の社別雷の神とするなり丹塗の矢ハ火雷命なり　松尾明神是なり
葵祭ハ卯月中の酉日欽明帝の御宇に始る大内より御車出て公卿あまた
騎るあとくおびたゞしく伝へけれバ東遊を奏し其儀式厳重にして美麗の
行粧他にすぐれたる祭礼なり

新古今

みあれにまゐる社の司をのくあふひをかけけるを見て　あふひ葵のこと

ゆるされし神よりあふひのかつらせし何にかけてもかけてるまし　加茂重保

五月五日の競馬ハ昔し大内裏武徳殿にて騎射ありし此例によるとかや
朝には足揃あり神主遠く来る家来を着し左右に別て勝負を決する場のたぐひ
あり見る中にも落馬したるハ負とし六月十九日より晦日迄ハ夏越祓
とて御手洗川に出て諸人群参するに晦日の夜ハ上鴨の神前において神楽あり

新古今

涼みをとりけみたらしの水の面にうつる光ハ千代もうつらじ　経

此所ハ加茂へまうでける人の夏にこえんところといへり
日蔭山二葉山ハ上鴨神殿の東にありて御生山ハ別名なり石川瀬見の
小川鴨の石川あるいハ瀬見の小川とすべてをいふとかや

続古今

君が代も我世もはてし石川や瀬見の小川の絶じとぞ思へハ　鎌倉右大臣

家集

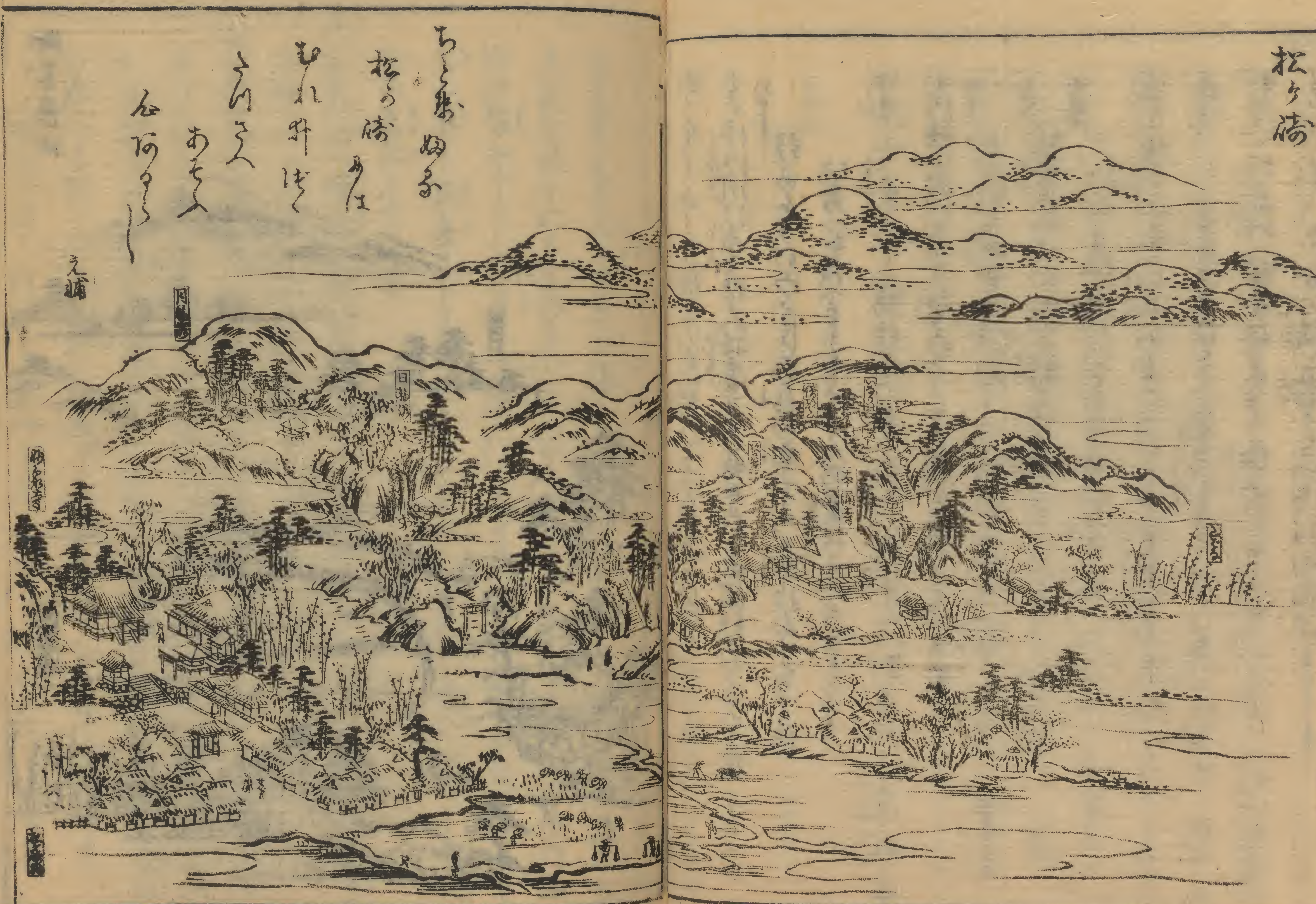
降雪にみてし川に水くゞるにぞすゝなるらし浪乃音　定家

続後撰

さらぬだに鴨の瀬川のその上をおもへハ久し世々の河くさ　前太政大臣

岩本橋本の社ハ住吉和歌の二神にして業平實方の化現なりとも云傳へ
古記にいはく平安の京ハ百王不易の都なり東に厳神あり西に猛霊あり
あはく厳神ハ鴨大神宮なり猛霊ハ松尾の霊社なり二神の鎮護に
よりてく万代平安の福を崇るも此御神の威徳なりとぞ

松ヶ崎



松崎涌泉寺ハ開基日生上人にして日蓮宗流なり天正年中に法華園純
の学室とするが泉涌ハ日像上人の弘めたまひし所にして日宗たり
毎年七月十六日堂の前にて此里の老若男女うち交り題目をとなへ
にけ鉦打ならし拍子をとり踊をおどる是なん松崎の題目をどりとて
名に高し其夜からしこの山にハいくつとなく法の二字を焼火に照して盂蘭盆
會の送火とぞいふなり
御菩薩池ハ幡枝村南にありて傍に地蔵堂あり平相国清盛の代西光
法師がいとなみし七ヶ所六地蔵廻りの其一なり
市原の普陀洛寺ハいにしへ清原深養父の幽棲しける所にて舊地ハ是より
丑寅のかたにて堂の名をとゞめて後白川上皇大原の女院を訪ひ玉ひて此
所を通り普陀洛寺に御幸のことあり庭に小野小町の髑髏
の墓あり昔人市原野を通りしにすゝき一むらの中より
秋風の吹につけてもあなめく小野とハいはじ薄生ひけり
小野小町

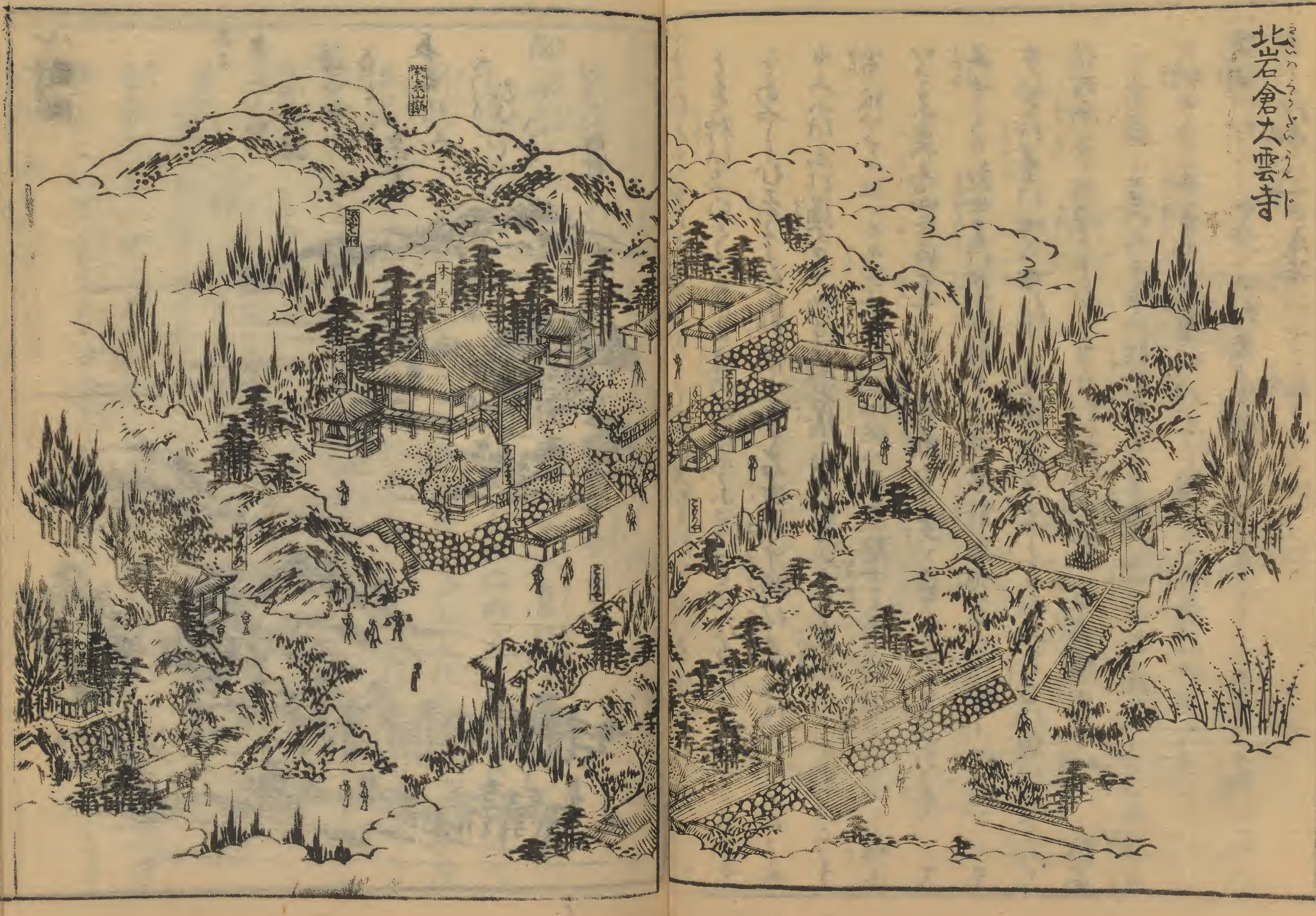
御菩薩池



岩蔵大雲寺は天台宗にして本尊は聖観世音の立像なり行基の作
とぞ称しけるのそのかみは玉体の御なやみ事によりて(?)たうびく所あり(?)人臣
をあやしむ云々よりて勅使として右近衛中将何某はるかにつかはせしめ
ゆゑに此山の麓なり勅使不思議におもひ其ふもとにいたり忽然としてのしらう
翁(?)出て老尼現れ曰此地は古き観世音降臨の霊地にて吾常に
いくさ(?)に異香四方に薫じ空に霊嶽あり是を窺つれば天に音楽を奏して
其中より観世音の光明赫々たる尊体を拝みそて此地に伽藍をたてゝ
おひて行基の作りおはし尊像を本尊とする大雲の額は詔によつて
佐理卿筆を染玉ひしなり 今本堂に開基は智弁僧正なり 元亨釈書に出
名を岩蔵とよぶは詔ありて王城の四方に石蔵をいとなみ経王
を納めらる其一なり又石座明神ましますは是石蔵のゆゑんなり
八塩岡はむかしより楓多くして秋の色は紅葉にさそはれ蜀錦を翻すにこと
ならず今は小野の尾降にかし侍る

市原小町寺





北岩倉大雲寺

長谷八幡宮ハ惟仁親王の勧請しおふ所之長谷花園中村之郷の氏神にして祭ハ八月十五日神輿一基あり

朗詠谷ハ大納言公任卿の幽居しおふ舊跡なり此所ハ長谷川を傍て北のかたすり山中に入ること五六町ばかりこれ成るて解脱寺といふ旧地あり今ふ礎石のこり侍るこれ此地の公任卿出家しのちこゝを里なり一町ばかり北に又一平地あり彼卿此所に住ゐひ和漢朗詠集を撰しおひしとなり又御所谷とも云ふ

世をそむきて長谷なりけるに入る中ねのをゆかり　まて住みしかしらきこゝろなりけれ

長谷遷

谷風にすれはとふ〳〵ひもんのいゝるかくすまことふしその後　公任

長谷川ハ八塩の岳より北西谷より流れ出て長谷村の中ほど西ハおかくれ岩倉大雲寺の前より東ふ落て幡枝村ふながる

花園ハ長谷の南にあり

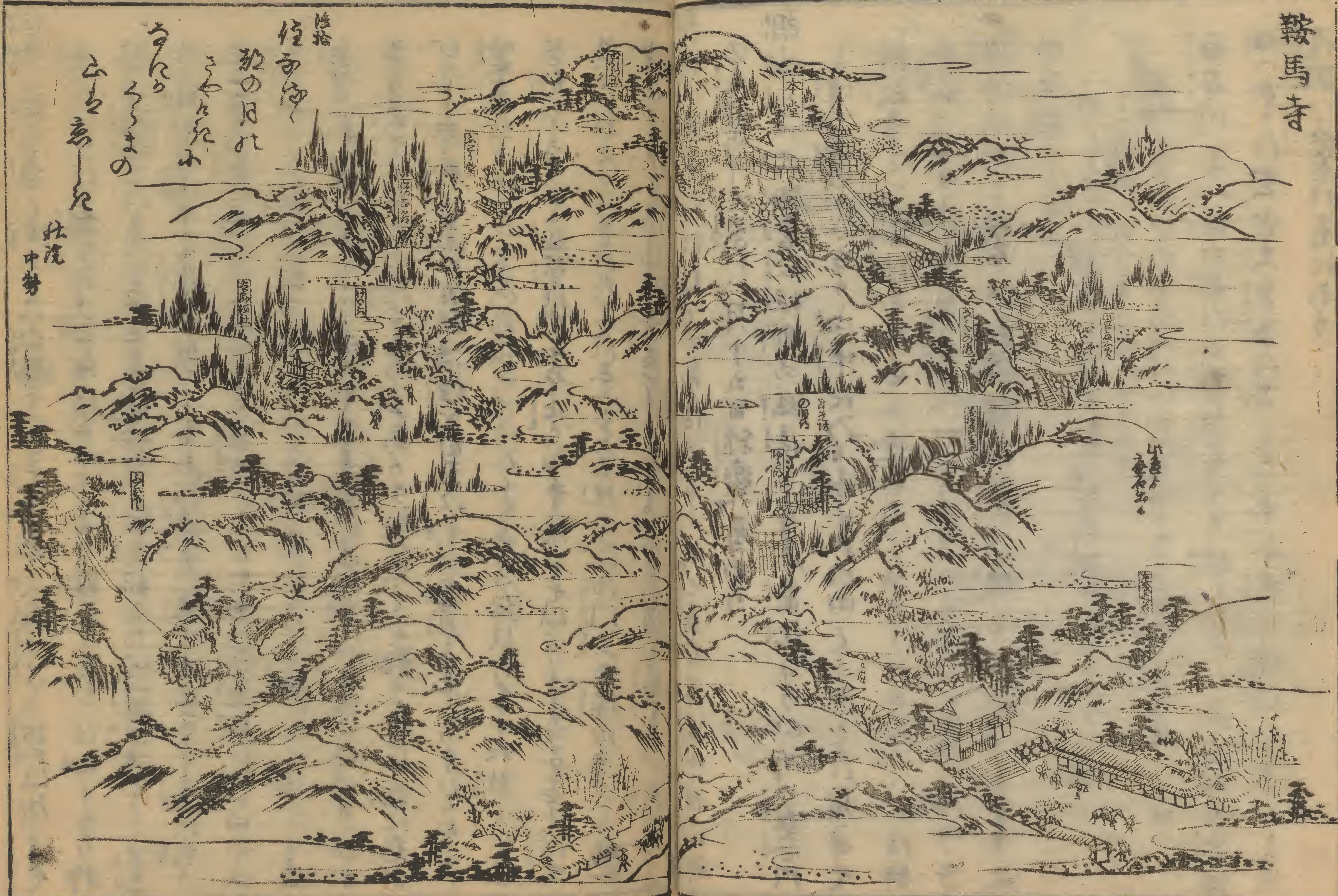
八塩岡

夫木

岩こゆる八しほの浪のあららかに染を長谷川にとしひさしうつ

西行




鞍馬寺
本堂
中務

松尾山鞍馬寺と号す。もとは白鳳十一年天武帝大友王子はじめて此所まで
逃のびたまひて鞍をかけたる所なれバ是より鞍馬と名づけ給ふとなり 作
此寺ハ延暦十五年に大中臣藤原伊勢人の草創なり 此人佛に帰せる志篤
かく勝地を求めて精舎をいとなみ観世音の像を安置せんと志に祈り
ある夜の夢に洛北の山頭に至るに白髪の老翁現れ語て曰 此山ハ
天下にたぐひなき形ハ二鉢に似たり 紫雲たなびく此山ハ精舎を建
立せバ利益無量ならんと告て翁の名を問しに王城の鎮護毘沙門
なり 夢覚て何国の所とも志らず ありけれバ久しく飼ひたる白馬に鞍を結ひ
ひつし摩騰法蘭ハ舎利経を白馬に負せ来りしに倣ひて放るに
霊畜なり 汝定て夢の地を志るらんとて東方を指て放しに其
る馬の行方ハ山上に至り茅萱の中に足を止りぬ 童帰りて此よしを告る 伊勢人是に来て
見るに夢に見たるにたがはず叢林に毘沙門天の像あり 此像を得て即一
宇をいとなみて此像を安置せり されども観音の像を安置せんと志て願ひ
とげざりしよしなげくに又其の夜の夢に天童来りて曰 汝多門天ハ衆を救ふ
観世音を称ふ 所謂観音と多門天とハ名ハ異なれども同一体なり 此を悟て疑
顔ひ今ハ足りと勅命を蒙り又一宇をいとなみて千手観音を安置し今
の本尊観音院と云ふなり 正月初の寅の日諸人群参をなす 寺ハ毘沙門天
十禅の福をあたへて世を捨たる遺所ありて貴人より卑に至り利潤に虎乃子をぞ
蹲る勢を縁起として此日参詣をなす 六月廿日の竹伐と云ハ当所に法会
人本堂と西の観音堂に集りて一丈ばかりの青竹を双方に立そなへ
堂ハ近江方観音堂ハ丹波方と名づけ一山の院坊法会を催し法衣に相応
頭に襷を合せ竹の中を三段にきりて堂を下り一の曲切石にて足をかけ
任せたく走りゆく早きを勝とする 此来由ハ往昔当山の鑑真僧正
此山にいりしに雌雄の大蛇あらはれて僧正を呑んとす 僧正念
ありしハ一ッの蛇忽に滅びぬ 今一ッハ向ひて云ふやう 今よりして人を悩まし
なく又当山の用水を絶さず守るべしとて放やりぬ 是をまもり

本堂は小にあり閼伽水滴々として涌出今にたゆる事なし是を竹の井とも
號ぶるぞかし人里へ出きりて魔衆掛入ける故又夜に入て異形の物を見る人本堂
の中に座せしめ峯延法力をもて打殺し又打活とするありかの偽人よりかく
毘沙門天に祈る故吉のあり役を止べき時にも吉の入夢ある不思議の事とも
多かりし記しておくて涼

靱明神は当寺の氏神にして大門のうちみなみにあり祭るところ大己貴命
一座なり朱雀院の御時天慶年中に勧請ある由来と号する事天下に其
御悩ありしは世のさはがしかりしとき靱を此社にかけられけるより　例祭九月九日
座石焼炭木芽漬は此所の名産なり鞍馬より出す総世に名高し

寄杉
庭たかくつもる木のは猶かきわけて杉ぞたつらん　顯季

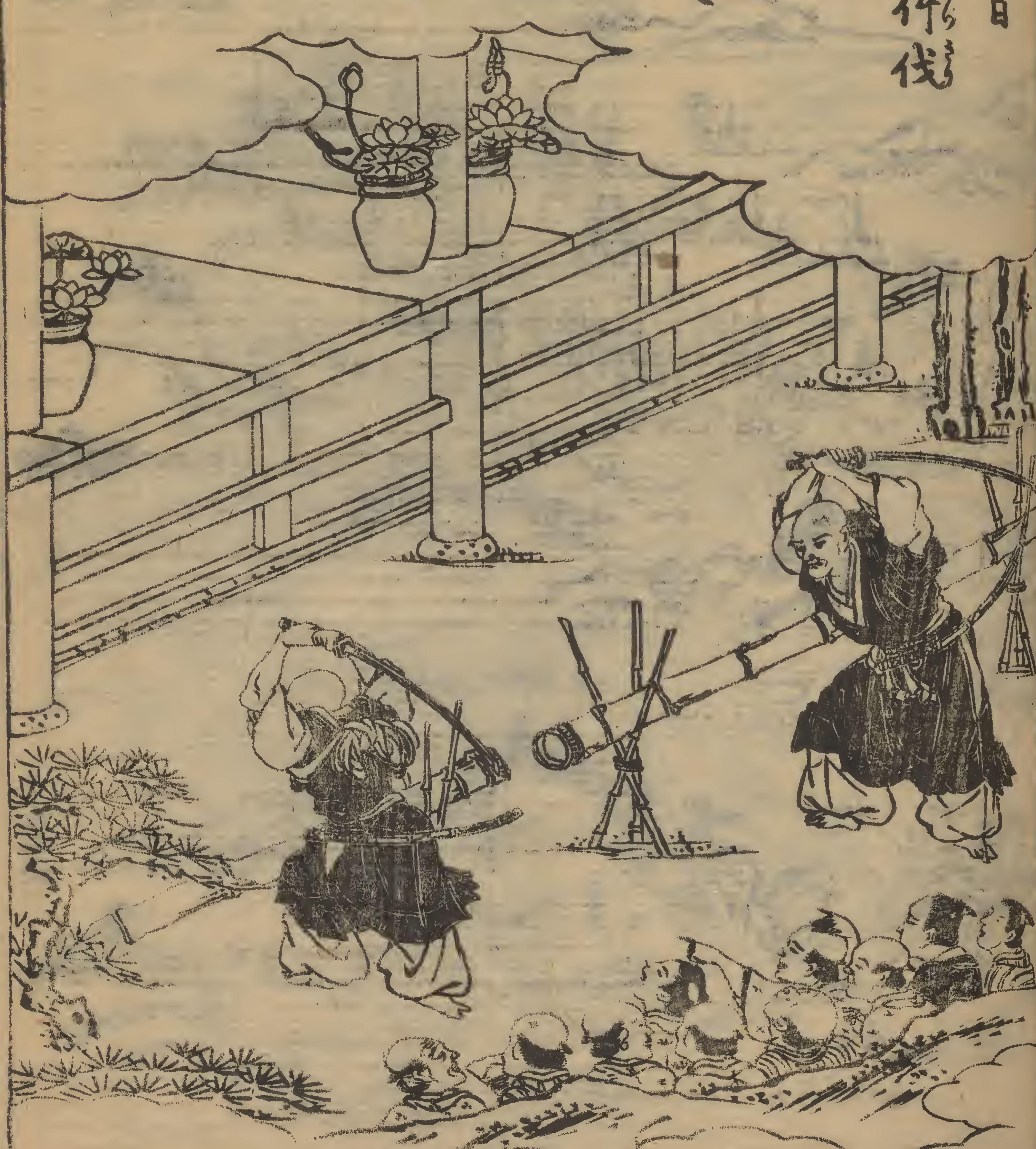
寄木
足やこのあれまてはくらす猶てさき見ゐむふさんけるなるへし　定頼

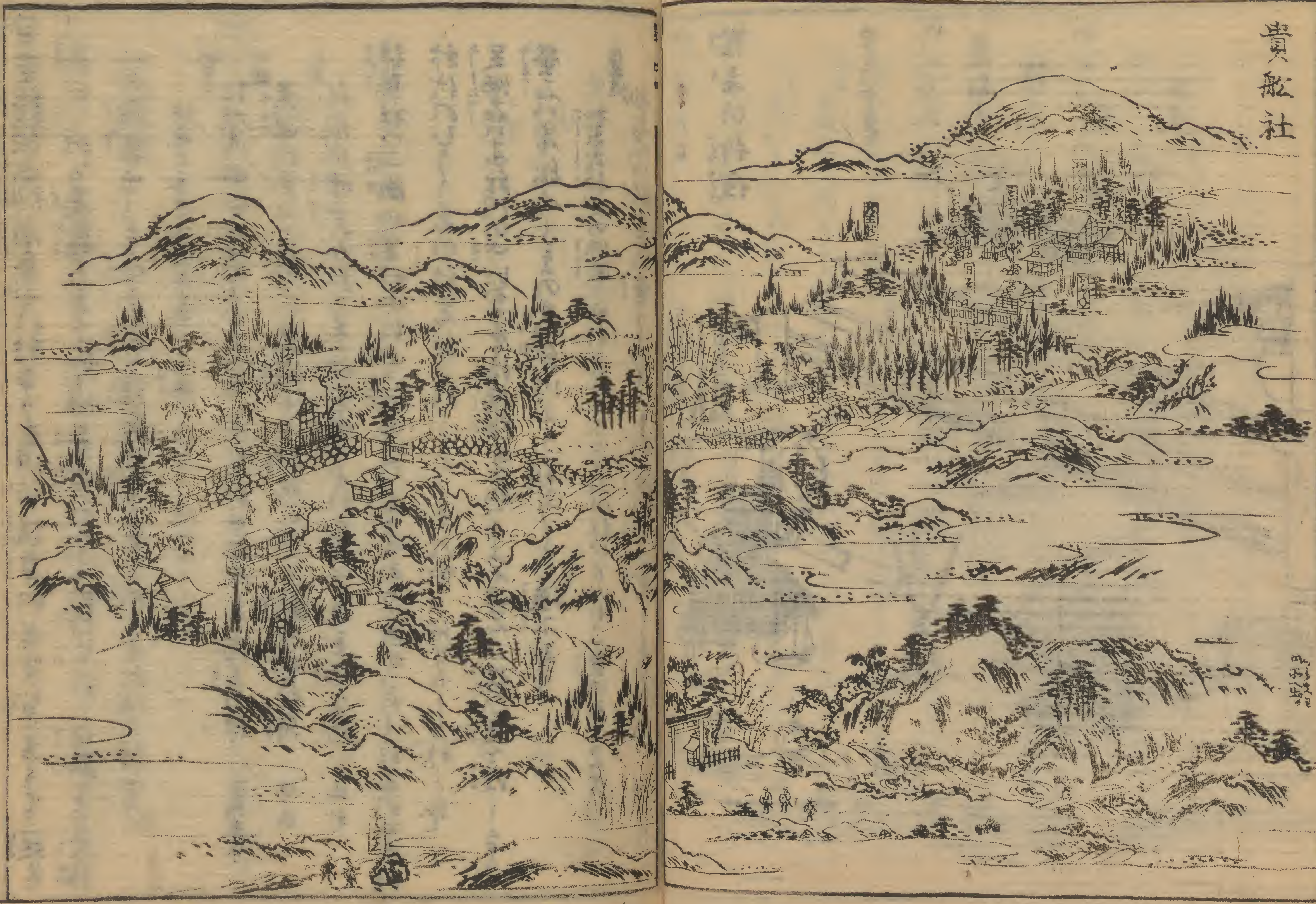
袖中抄云
毛珠桜は唐鞍に是珠を似くれは鞍馬の称号とするとそ

僧正谷は源牛若丸異人に遇ふ剣撃乃法を伝くうけし所なり

六月廿日
鞍馬の竹伐

僧正谷そ
蛇しらみ
鼻細く
僧よ
ぬんこ
烏
其角




貴船社

貴布祢社は水神罔象女の神なり是伊弉諾尊軻遇突智をきりて三段となし
其ひとつは高龗とぞなりける此垂迹はやまとの丹生社と同神なり雨師
徳の除難ふしぎ多く今も雨を請雨を止るを祈るには此二神なり
社司ともきうりうに参りて夜あらひせしはんぞふなり

古今
杉原の田もるかひなくあきのせみなげけそ神世の神　加茂幸平

千載
貴船川玉ちる瀬々の岩波に氷をくだく秋の夜の月　俊成

夫木
秋風の吹くなるは貴船山峯とゞろきて森ぞ鳴なる　成助

梶取社は二瀬の里はしに貴船の一の鳥居あり其かたはらにあり手を
神代のむかし某の神本船にのりて出現ましませし神をまつる
足洒石は本船川の中にあり宇治橋姫貴船へ詣し時此石に休ひ足を洗ひしなり
螢石は本船くらまの落合川より南にして渡にあり

後拾遺
和泉式部夫の保昌にわすれられけるか此社にまうでゝ螢の飛をみて
物おもへば沢の螢もわが身よりあくがれ出る玉かとぞみる　和泉式部

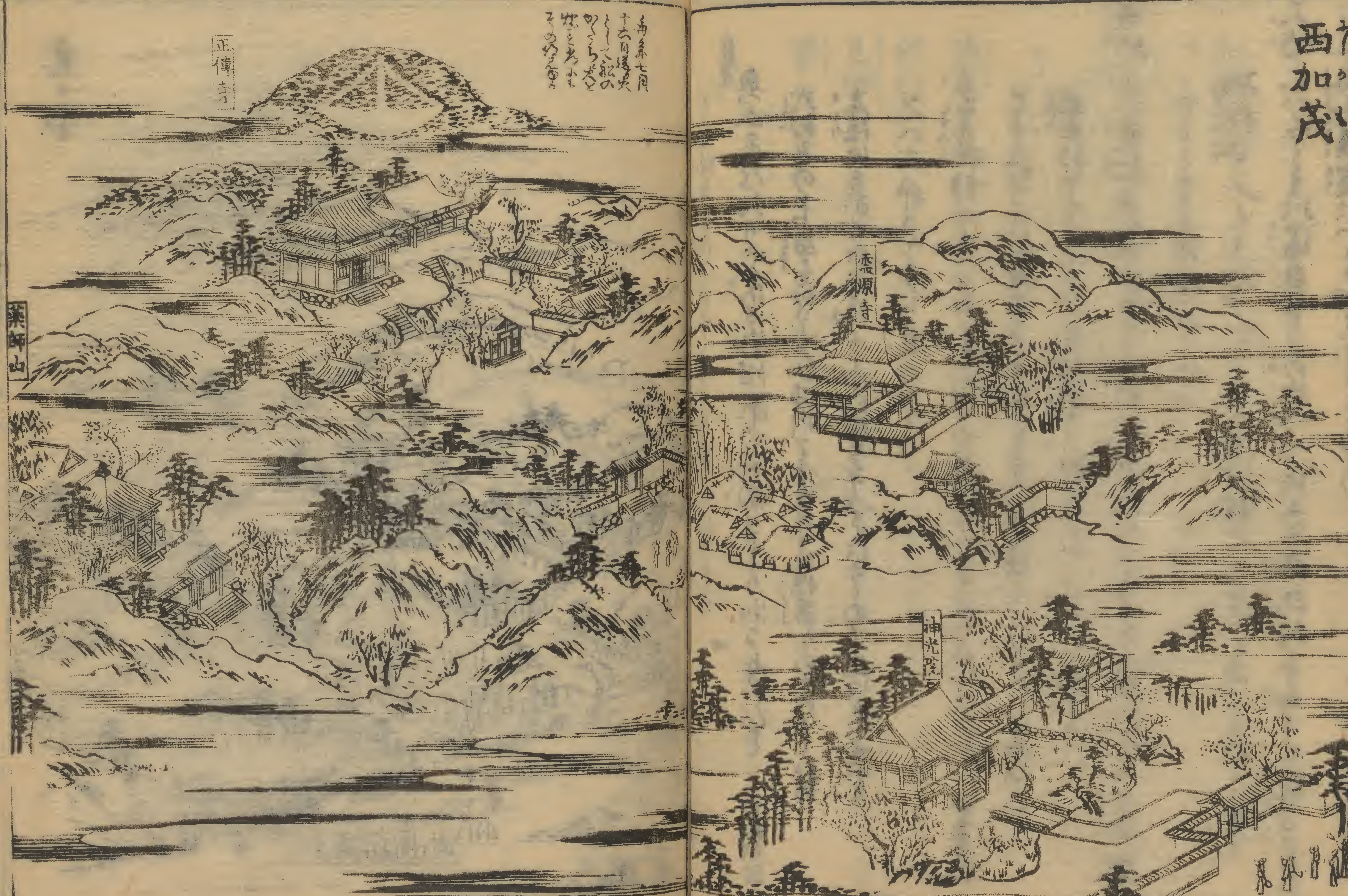
この御かへしは御社の中より男子の声にてきこえけるとぞ

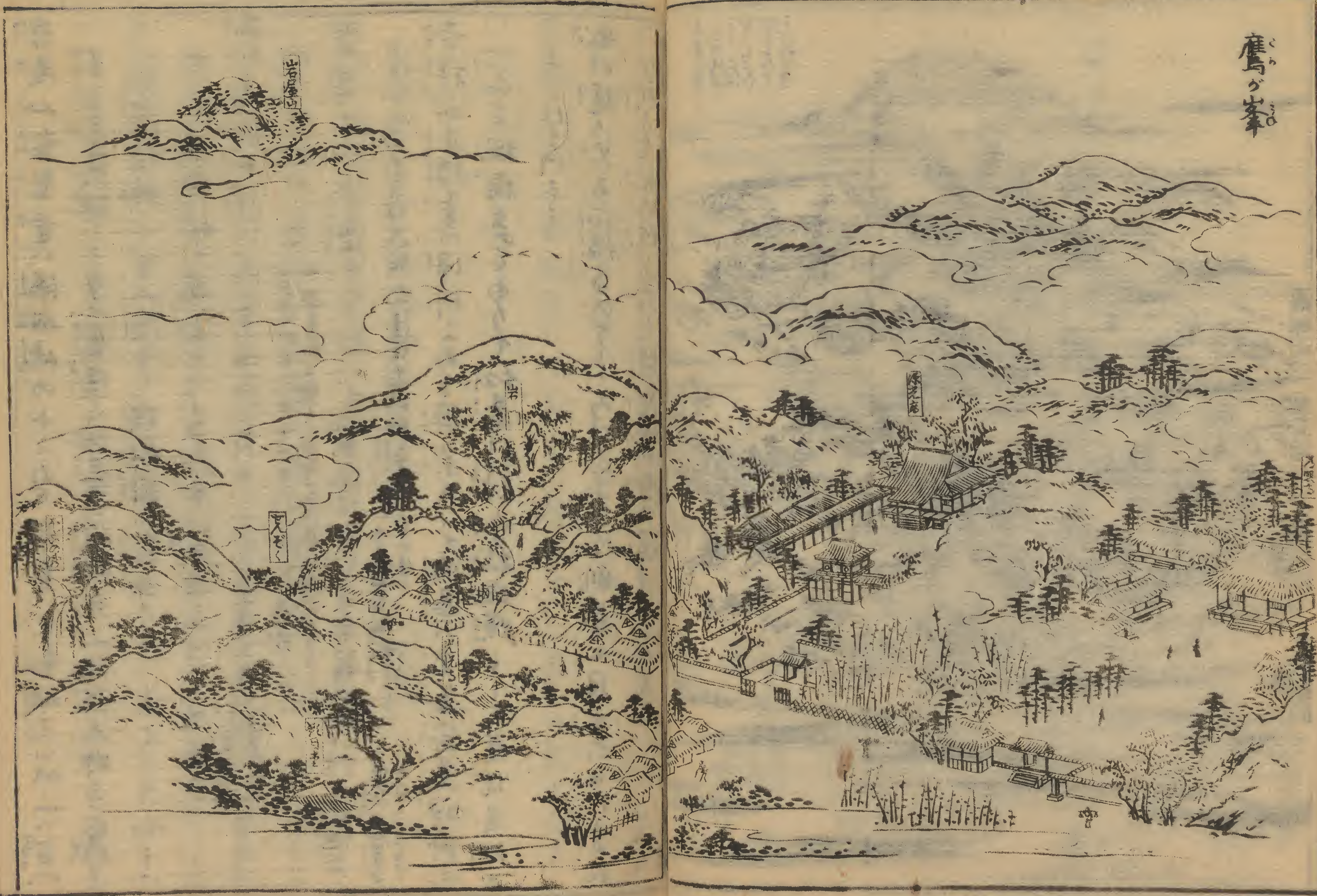
後拾遺
奥山にたぎりて落る滝つ瀬の玉ちるばかり物な思ひそ　貴船明神

式部そのゝち巫をかたらひはかりてさりける保昌がこゝろにとて社の
本社に立かくれて見侍りしに巫のするわざいとあさましき人と
又は式部うちかほ赤めて
千早振神の見る目もはづかしや身を思ふとて身をやすつべき　和泉式部
とよみけるを保昌きゝてもあはれと思ひ其のち優にやさしく思ひて
則式部をぐしてかへりなれむつびしとなり
暗部山は貴船山の北にあり日神岩戸に入ましし時此山にて世界暗く
くらやましといひ又暗闇山とも云

古今
梅花匂ふ春べはくらぶ山闇に越ゆれどしるくぞありける　貫之

大悲山はくらまの東奥にあり花背別所村にあり観音堂あり
平相国清盛のいとなみしとなり

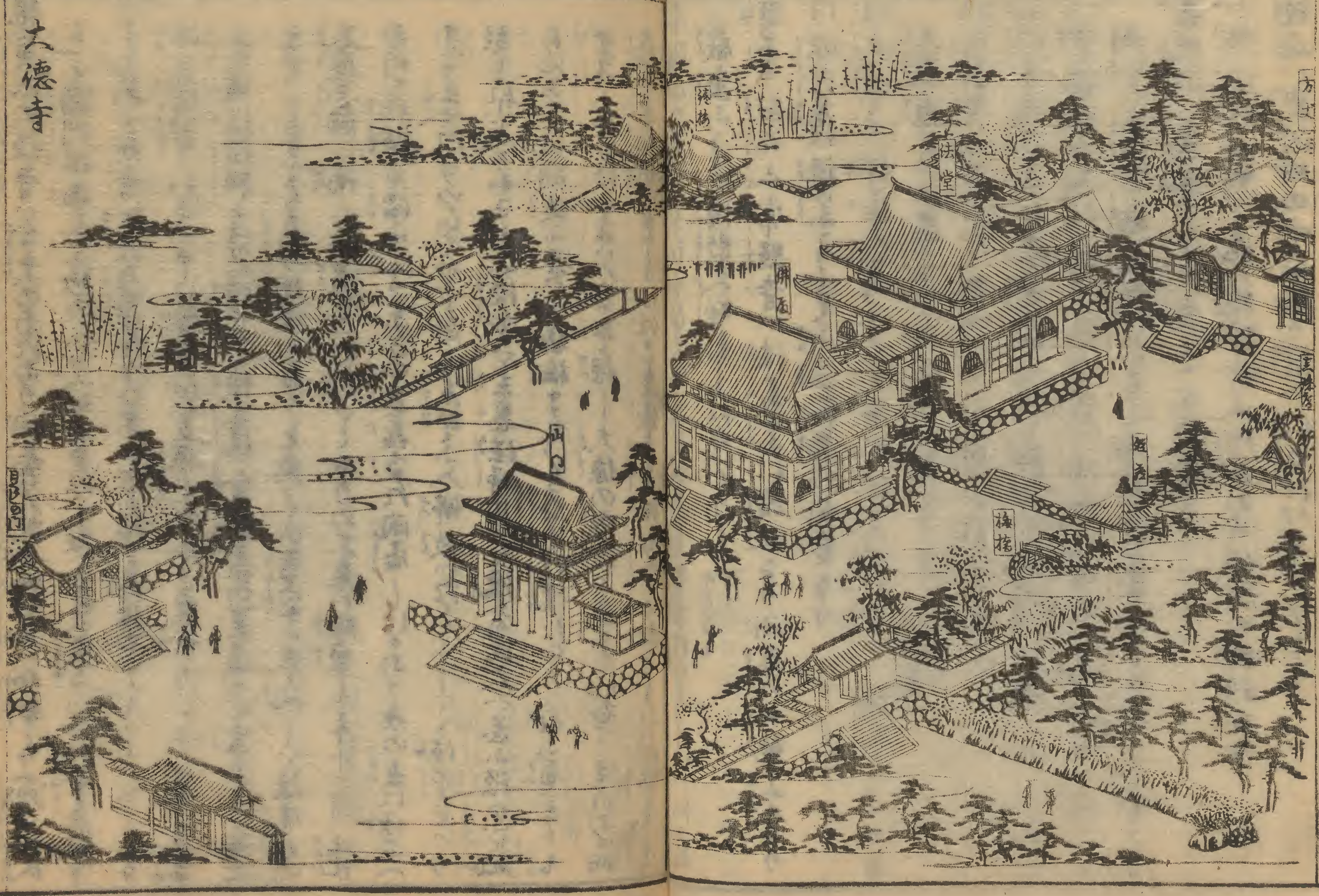

西加茂
正傳寺
薬師山
霊源寺
神光院


鷹ヶ峯
岩屋山

岩屋山金峯寺ハ満樹峠の山にあり本尊ハ不動明王也此山ハ古へ
薬王菩薩現しまし霊場也開基ハ役行者又弘法大師も爰に籠りて
密法修行し給ふ所なり桟敷嶽ハ岩屋より一里ばかり山上に
ありて惟喬親王御墓といふあり又幽居ありし所なり
西加茂神光院ハ開基弘法大師みづから自作の像を安置す 聖天の像を安置 厄除の所なり
愛染明王ハ弘法大師の作也 丑の年丑の月丑の日に丑の時に参れハ歯痛より災難をまぬかるとぞ
同所霊源寺ハ後水尾法皇の御願にて開基ハ佛頂国師ハ本尊ハ釈迦佛 日本一丈の仏 照堂には
後水尾帝の聖像又開山の像を安置す 辨財天社 東福門院の御作也 撞鐘堂 大仏殿金仏の御首を以て鋳る
あへたらんかし
吉祥山正伝寺ハ同所にあり禅宗にして開基ハ東岩宏慧禅師也
一山に楓樹多くありて紅葉の頃ハ千枝爛熳として楚岸呉江と
いふべし
舩の送り火ハ正伝寺のうしろの山にあり例歳七月十六日の宵に
此所にて舩の形に火を焼聖霊会の送り火とするなり

薬師山ハ草堂をむすびて瑠璃光如来を安置したまひしハ伽藍
厳重にして伝教大師の建立なりとかや 今尼寺となる
鷹峯寂光山常照寺ハ法華宗にして檀林なり開基ハ日乾上人なり
同源光庵ハ禅宗にして卍山和尚の開基なり
同光悦寺ハ法華宗にして元本阿弥光悦の営し所なりしを寺となす
太虚庵といふハ羅山先生此庵の記をうけるぞとなり 羅山文集
同蓮因堂此奥にあり常行蓮因と唱へてあるなり
石門ハある峯の下にあり両岩ありて其さま石門を構ふるが如くなる是を
霊巌寺の石門といふむかし圓行法師入唐して青龍寺の義真より
両部の密教を授て承和六年に帰朝して霊巌寺を開闢しき其跡なり
菩提瀧ハ鷹峯より一里ばかり西にあり
小野道風のやしろハ杉坂といふ所にあり此所の氏神なり
冠石ハ東河内の中にあり冠の形なれバ名とするなり

大德寺



龍寶山大徳寺ハ今宮の南にあり開基ハ大燈国師名ハ妙超といふ姓ハ紀氏
もと播州揖西といふ所の人也父母子なきをうれへ虚空蔵に祈り
しけれバある夜母の夢に虚空より飛来りて懐に入と見てはらみぬ
妊り給ひて誕生ありしに骨相つねならず眼光ありてやゝ異相なり十一歳にて書写
山の戒信律師に従ひて経書を読九流之義百家の異道おそれ究めずといふ事なし
もろこしにわたりて京師相模に至り多くの名宿に参問して後建長の
大應国師に謁し悟道ありて門人となり大應ハ延慶元年十二月に遷化
ありて後都に上り東山の雲居に閑居しけるある夜の夢に傳燈の人
来りて出世をすゝめしかバ紫野に入佛殿をたて法堂をつくり
給ひしとかやさて又洗玄恵法師其外儒者九人一志に禅宗を破
らんとて朝廷に奏し議論ありしかど悉く法儒をくじかれ師の
弟子となり洗玄恵ハ入室参禅し大徳の方丈を建玄門庵と号る
花園帝御帰依ありし仏法不思議の王法對坐し勅答ありしかバ御帰依まし
王法不思議ト佛法對坐すと勅答せられしより後醍醐天皇にも
いよく尊信浅からず御崇敬ありて興禪大燈国師の號を賜ふ又高照
正燈国師の号を加へ給ふ延元二年丑備月廿二日遷化ありて五十六 己上大燈国師行状の要をとる
佛殿ハ釈迦佛を本尊として梵天帝釈天達磨臨済の像を安置し
門庵にハ大燈国師の像あり其外花園院後醍醐院後土御門院の牌を
まつり又大應国師の画像も傳ふあり
真珠庵ハ一休和尚此寺に住居ありしところ真珠庵と一休の筆の
額あり庭に名泉あり和泉武野紹鷗が住居の宅地なりしといふ
當寺の伽藍ハ赤松圓心ともに則祐が石の料を寄て山門ハ連歌師
宗長修造し閣ハ千利休方丈門ハ明智光秀寄進なりといふ
むらさき野ハ今の大徳寺なりむかしハ紫のふたり

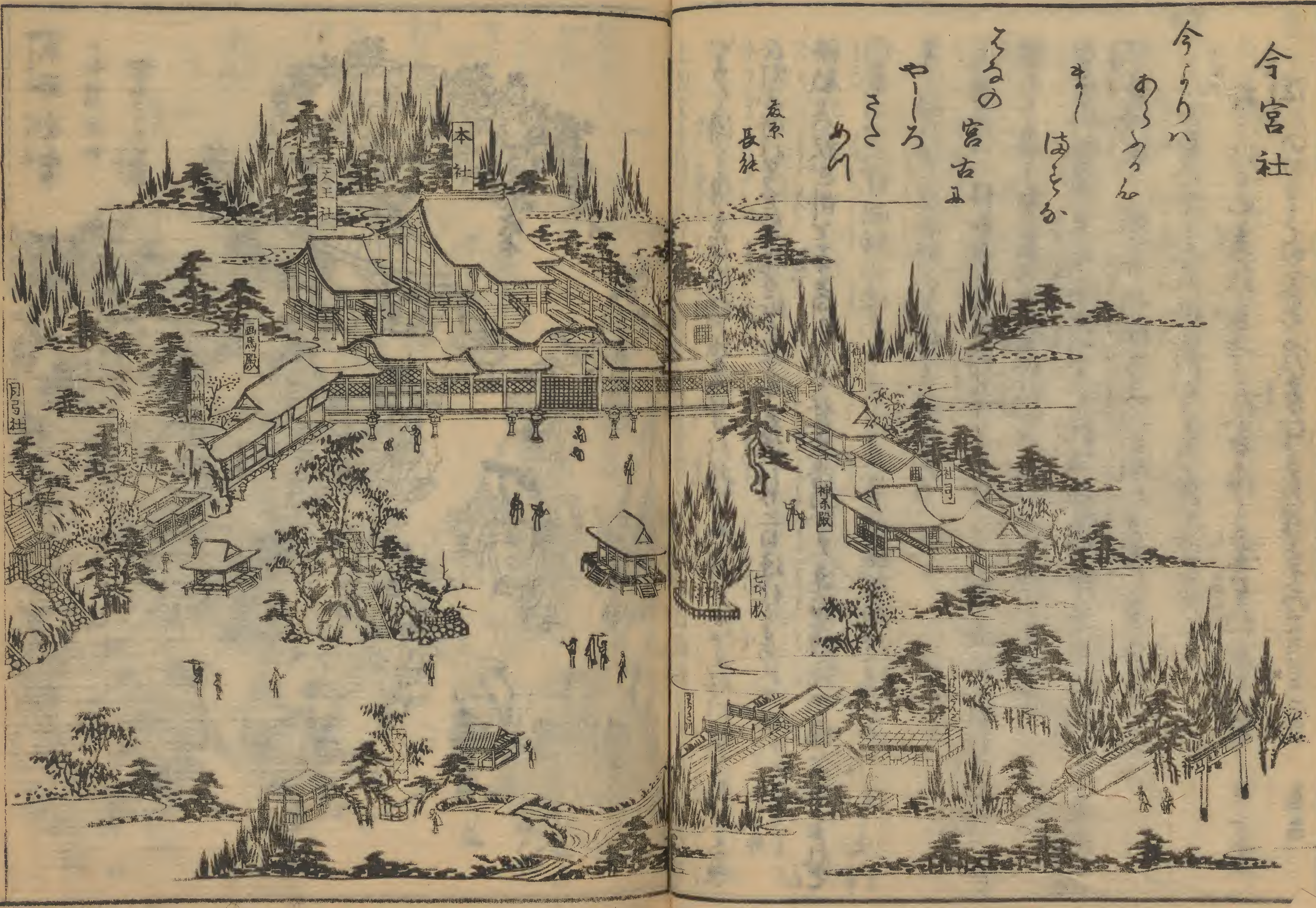
続古今　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　後土御門院
祝ひそや君がよきめくさき紫野の雲をしるしの康ぞのみ

夫木集
法人のいとしてかみあるひとむらさき野そめてみとりあるかな　　兼昌

今宮社

今よりハ
あらふる
まし
ますな
花の宮古に
やしろさため
つ

藤原
長能




紫野今宮
三月十日
やすらひ祭


當所と加茂乃人々社頭をめぐりてやすらひ花よとをどりたはむれ神前にいのりて疫癘をはらふなり

今宮の社は紫野にあり疫神を祭る一条院の御宇正暦五年六月廿七日船岡の山上
に神輿を作り安置ありて長保三年五月九日此所にうつして今宮と
あがめらる今は牛頭天王を勧請して二座なり

後拾遺
白妙のとよみてぐらをとりもちていはひぞそむる紫の野に　藤原長能

弥生十日よりは夜須禮まつりとて加茂上野の里人烏帽子素襖をきてその上の衣を着て
太刀をさげ笛を吹鉦鼓をならし此社をめぐりてやすらひ花よと唄ひ踊る一説
に春陽の節はかならず疫の神分散して人を悩すゆへ当社をまつりて此
忌を禁るとぞ其始は高雄の神護寺の法華会は今宮にて修して悪
気を去るとて踊をするとなん此始やすらひ祭を高雄の法華会をまなびて
なぞよしとそやせしとぞ又の説にやすらひ花よとうたひ花をちらさじともいふ説あり
御霊会は五月十五日又の七日は御出とて船岡山の東にすゑ頭まゐりて飾る
常盤の古跡義経誕生の地は今宮の東大徳寺の傍にあり左馬頭義朝の別館也

[illegible]

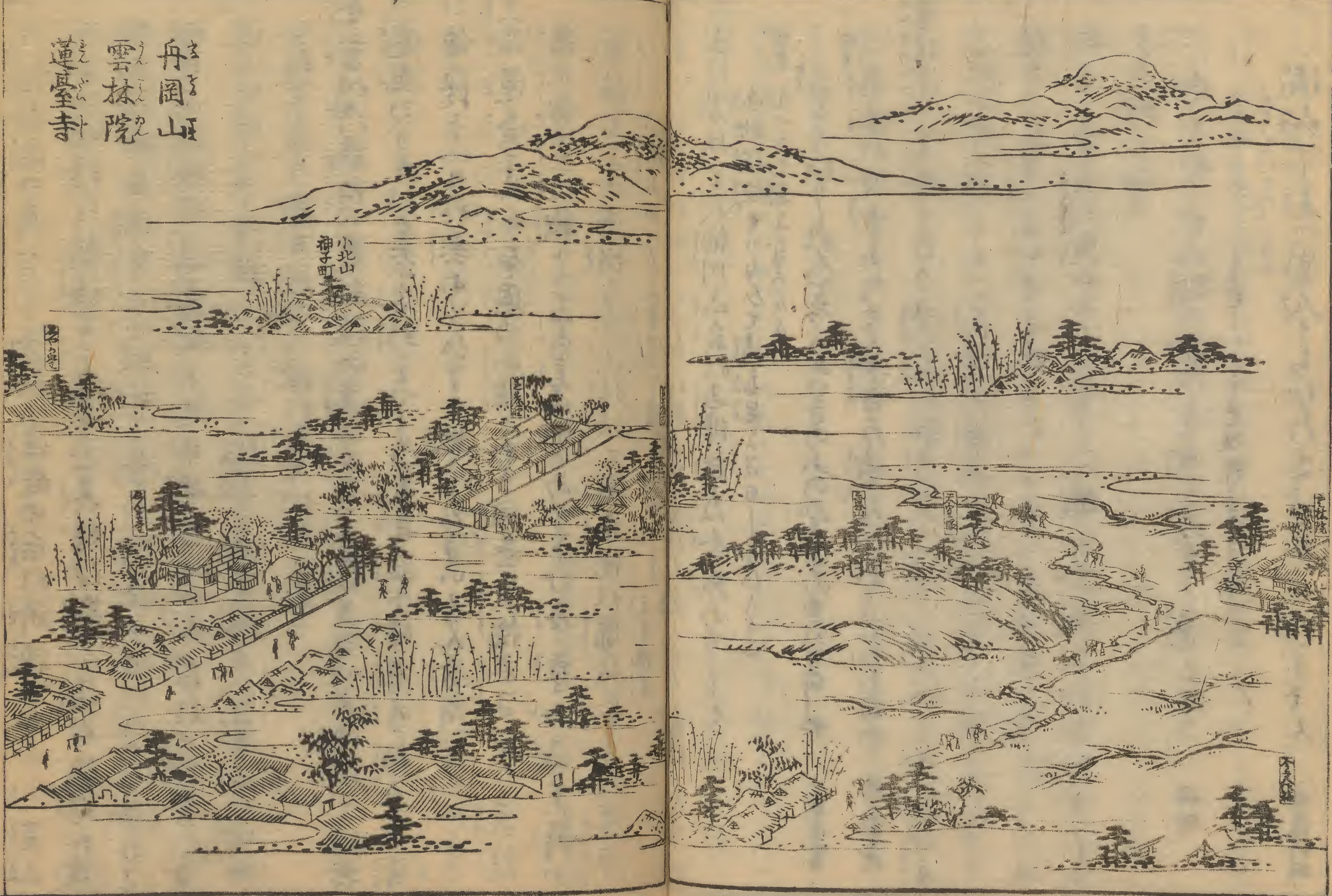
船岡山は紫野の西にあり船の形に似たればかく名づけたり應仁年中此
山に砦をかまへ細川山名の両陣数度合戦ありしと
圓融院位さりたまひて後船岡に子日しけるに
新古今　まいりて詠ける
あかなくにむれゐる人を見よはきのふの野べにみゆきせましや　二条右大臣

拾遺
舟岡の野中にたてる女郎花わたさぬ人はあらじとぞ思ふ　讀人不知

雲林院は紫野にあり淳和帝の離宮なり仁明天皇の御子常康親王
これを伝へ領し給ひ其後天暦帝の御時僧正遍照を別当と
補せられ堂塔巌重に建られたり今は雲林院と唱て此あたりの
郷名とする旧跡纔にのこるむかしは桜の名所なれど和歌にも
雲の林と詠る

今ぞしる雲の林の星はそらにみだるゝ螢なりけり　経信

うへのをのこども花見んとて雲林院にまかりけるに
よそにてつかはしける
浦山し春の宮人うちむれておのがものとや花をみるらん　良暹法師


舟岡山
雲林院
蓮臺寺
小北山
神子町

七の社ハ舟岡の南にあり當社ハ深殿の后の祈願によりて三笠山の春日明神を勧請ましましとぞ其後伊勢石清水稲荷加茂松尾平野を併せまつり七の社と号を又一説に洛の北ハ七野あり内野北野柏野蓮臺野上野平野紫野の中に祭れる神なれバ七の社といふとぞ諸願あるものハ社の前の砂を積て三笠山の状をうつし奉れり春日影向の椋の木も此地にあり

今宮の御旅所ハ雲林院の巽にあり毎歳五月七日本社より神輿遷座ありけれバ茶店軒をつらね芝居放下師なとうち揃ひ商絶えず十八日神輿かへりまて賑しかりけるいふ方なし

上品蓮臺寺ハ千本通の北頭にあり開基聖徳太子なり其後僧正観空住職して眞言宗となれり本尊地蔵菩薩ハ聖徳太子の御作なり又弘法大師自作の像を安置す寛平上皇此所にありて蜜灌を稟給へし 出元亨釋書

金山天王寺ハ北野社東の門通にあり天台宗にして本尊如意輪観音ハ聖徳太子の作なり 洛陽観音巡の其一ヶ所 開基ハ聖徳太子にして則自作の像を安置す太子堂の額ハ釋迦如来轉毫光所上宮太子淨跡中心と書して小松院の宸翰あり

紅梅殿ハ天王寺の北にあり祭る所菅神の愛し給ふ飛梅の霊神なり

清和院ハ七本松通一条の北にあり眞言宗にして聖観音地蔵菩薩の二尊を安置す原ハ京極通春日にあり今清和院御門と號を明暦年中に此地に移る

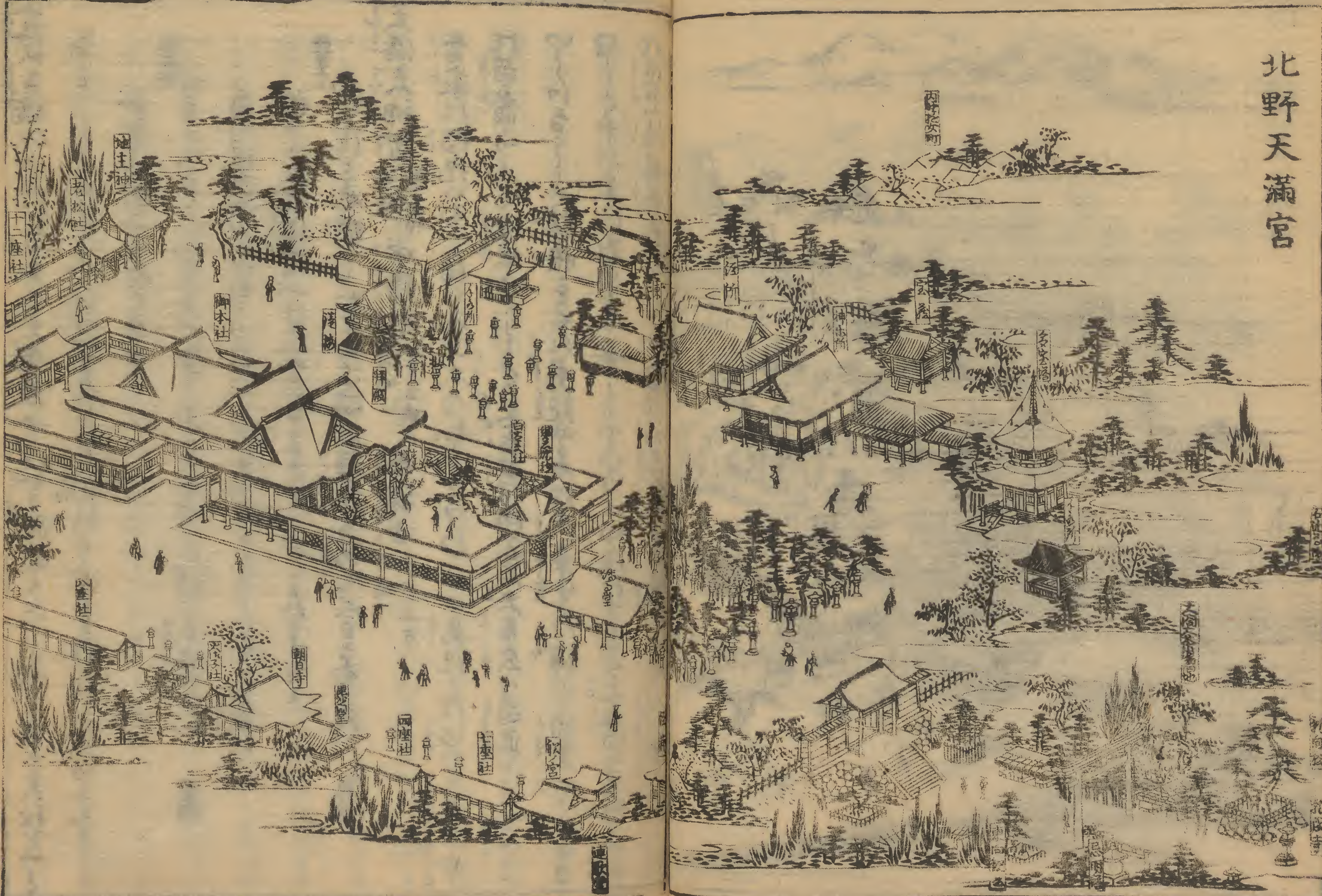
具足山立本寺ハ旧通正親町の西にあり法華宗にして日像上人の開基なり祖師堂に安置す日蓮上人の像を曽影といふ人初め龍口の比男左衞門佐久道が侍に佐々木慶次といふ者出陣の時に中に懐にて昔の祓ひ土中に藏む盗人其八を集んとそらに磐石の如くして大に惶し懺次に懺悔して當宗門とならせ尊像より仕て終を遂ぬる

千本焔魔堂ハ蓮臺寺の南にあり引接寺と号す宗旨ハ真言也
本尊ハ焔魔大王にして法橋定朝の作當寺の開基ハ定覚
律師と鐘の銘にあり大念佛ハ文永年中に如輪上人はじ
めて此寺の桜に普賢像といふあり弥生の比花盛をまちて
狂言をなさしむる也 一説にむかし篁の窟は日蔵上人冥土より
かへりて帝にまみえて上人に向ひて宣ふやうハ我娑婆の業
因深くして今猶苦しめり是を免かれ給はゞ娑婆に帰つて我
為に千本の卒土婆を供養すへしと一首の哥を添給ふ
いふまゝく樒の底に入ぬれハ刹利も首陀もかはらさりけり
日蔵肝に銘して蘇生しこの事ハ叡聞に達しければ舟岡に
千本の卒土婆をたて當寺を建立しいかめしき法会ありて供養しけるとなん
大報恩寺ハ引接寺の西にあり千本釈迦堂といふ本尊釈迦佛ハ安阿弥
の作也宗旨真言にして開基求法上人也 毎年二月は遺教経の法会あり 世人此寺をさして イキケウくらよ

七野社




轉法輪寺
七本松


北野天満宮
十二座社
御本社

小野ハ王城の小西の方なり天暦年中に聖廟影向し給ふ其社とて
なりとしくり諸来る人陰晴をおそるゝ行はてゝ人さまよ神威をはゞからざるべし

小野の宮によみてまゐりける

續後撰
くもりなき人こそしられ世の末かけてなかの人神ハ天満るらん　慈円

白川院の御ときにあらはされかけられけるによりて湧出る心地
給ひし唐鏡を小野の宮へ奉りてそのゆへしれたる事なる

續古今
身をはなれて照しおかさる鏡に浮たる影もくもらぬかな　兼輔

天満天神宮　中殿 菅丞相　中將殿 東向 菅公嫡子　吉祥女 西向 右大臣小方

菅家の御先祖ハあまねく世の人乃知るところなれバ委記さず祖ハ天穂日命の苗裔にして歴世ぞしく學者の御子右大臣名ハ道眞と申奉りいとけなうして穎悟をぐれ貞觀四年に文章生に補し學業ますます同じく十二年に對策及第し十八歳に侍従にすゝみ元慶六年渤海國の使者鴻臚館にみちくて右大臣の詩藻を称しけるハ風教自樂そんへ何ゝりけるとかや仁和年中に讃岐守に任し寛平五年に参議となり六年九月に吉祥院にて五十賀を催しけり九年に中納言を經ずして權大納言となり○昌泰二年二月右大臣にすゝみ右大將をかね左大臣時平朝臣時平ともに上皇の勅をうけ天子を補佐したてまつりしぬ帝十四にして從ふ聰明にして位に任給ふ一日朱雀院上皇御所にわたらせ給ひて上皇帝に譲りたまひしハ右大臣年高く才賢しとて任用せられ右大臣に事さむへ左大臣大ひにそしりをなす妹の皇后なりける故にかくふかく讒せしかハ遂に昌泰四年正月廿日太宰權師に左遷し給ひけり三とせをへて延喜三年二月廿五日配所にて薨じ給ひ安樂寺に葬る御年五十九才之真後菅霊あらはれさまざまくるわしければ延長元年に左遷の宣旨をもどして官に復し正二位を贈りぬ天慶三年七月菅丞相右京七条の文子といふものゝ御託宣ありて小野右近の馬場に據との給ふ近江の比良の社の禰宜良種に託し給ひけるハ大内の小野に一夜に千本の松を生ぜん社をバ天満天神と崇べし

ところなれ於て朝日寺の僧最珍右京の文子なると力を合せ霊祠を作り
天徳二年右大臣師輔なども神威をうやまひ麁なる大廈とあらためしと
なりけり今の北野宮是也一条院の御宇正暦四年五月に勅使を宰府の安
楽寺につかはし太政大臣正一位を贈りたまへり末社に紅の宮といへる一夜の
松あり此祠に神秘の法文ありとかや 已上縁起
二月廿五日は菜種の御供の御神事あり七月七日は御手洗とて参詣人多し
殿に入神宝虫干あり九月四日当社の祭礼あり
東向観音は元明塔の西側にあり本尊は梅桜の二樹をもて菅神の御作なり
きざみ給ふ八十一面観世音なり
頼政塚寺は東向松の坤にあり本尊は釈迦多宝仏の二尊なり此寺を
足利将軍義満公山名氏清と内野に於て合戦あり義満討勝給ひて
氏清の首級を此寺へ送り給ふ氏清は無双の勇士なるゆへ其追悼のためとて道場を
建一万部の御経を読誦しのひけり故に経王堂といふ

平野の社は小野宮へ乾のかたにあり祭るところ神四座なり源平高階大江此四姓の
氏神なり　第一今木神 日本武尊 源氏　第二久度神 仲哀天皇 平氏　第三古開神 仁徳天皇 高階氏
第四比咩神 天照大神 大江氏
県社は天穂日命 中原 清原 菅原 秋篠 四姓の氏神なり昔しろは桓武天皇延暦年
中に建立せり御くらゐは正一位清和天皇貞観六年七月十日にさづけ
奉りし例祭は九月上の申の日なり

拾遺　生きてしもみし京のあや杉よされ紫の立かへらなく　元輔

続古今　難波津よりゆきかへりせしむすぶやの平野の松にかかる白雲　家隆

新千載　ちはやふる平野の松もふたたびは花咲く春のためしなりけり　よしたゝ

紙屋川とふかいむかし此川のほとりにて紙をすきける所なり
大嘗会の御禊に菟見川の橋より平野の橋までおほしかくて行かるゝと云ふ
川は紙屋川の別名なり又仁和川ともいふむかしは仁和寺辺を流れて末は
紙屋川の流れしまで西院を流れくだり遠くつづけ行きしといひ伝ふ

平野社

新千載

ちはやふる平野の松も
[illegible]

よみ人しらず




金閣寺
衣笠山
金閣
九山八海石
鏡湖池
夕佳亭
春日社
安民沢
龍門瀑

金閣寺ハ平野の北衣笠山のふもとにあり禅宗にして鹿苑寺といふ
應永四年に将軍義満公（鹿苑院殿也）高閣をたて花美をつくし金銀をもて
一面にちりばめ閣の前にハ池広くして九山八海をうつし作り玉へり
金閣三重にして第一を法水院といふ（弥陀の三尊 夢窓国師の像）第二を潮
音洞といふ（自作本の観音 四天王を安じ）第三を究竟頂といふ（後小松院勅額あり 板敷三間四面 一枚板四壁の板ことごとく金箔を押せり）（鹿園院殿道義の像あり）
むかしハ境地ひろかりしより惣門ハ紙屋川の西今の地蔵院の傍に
あり礎今にあり所々を芳湊といふ金閣の廻りなる池にして芳湊の名あり
石橋殺架を池の南に拱北楼あり巽に小御堂あり東に地蔵堂（教体安じ 其の）
地を地蔵寺といふ真中に大塔あり本尊弥勒方丈にハ一休あり紹目
と號しぬ北方の巖の観世地にをくれさるへし
鏡石ハ金閣寺の北紙屋川のうへにあり石面あきらかにして影をうつすを
以て名とせり

古今夷曲
うつるかげ姿の黒髪やかくしらん鏡の秋に霜の白髪　貞之



鏡石ハ物の影よくうつれバこそ
あらそうつる怪石形りものとし
唐土に仙人鏡といふ石あり
形魔大にして石面蛟とうつり
よく人の五臓をうつすと云
あるひハ則其形あり
めぐらしぞされるのみくらひ
くやしつなき

等持院




龍安寺
法堂
方丈
浴室

等持院ハ衣笠山の麓にあり
開基ハ夢窓国師にして足利尊氏公の建立なりいにしへハ仁和寺の
一院とぞ本尊の地蔵菩薩大聖歓喜天の堂鎮守六請明神等
今に至つてもむかしの遺跡なり等持院の竪額ハ相国義満公の筆
足利家累代の昭堂ハ慈照院義政公のいとなミなり證果の額ハ
開山夢窓の筆なり

衣笠山ハ等持院のうしろなる山なり仁治年中に内大臣藤原家良公
別荘を建られ衣笠内大臣といへハ是なり

新六帖　衣笠内府
てらすなる都のいぬ井宿ハ大内山の麓なりけり

絹掛山といふハむかし寛平法皇御室に於て夏の月の光天より源
書の眺をなさんとて此峯に白絹をかけさせ雪をなしたまひしとぞ
ゆへといひ侍る

小松内大臣重盛山荘の地ハ衣笠山の東なる麓にあり

大竜山龍安寺ハ等持院の西にあり
開基ハ義天和尚文明年中に細川右京大夫勝元のいとなみなり
初ハ左大臣実能公の山荘なり徳大寺公有公の代細川勝元此地を乞
請られしより寺となる本尊ハ釈迦仏太元達磨の像ハ東西の壇にあり恵光禅師
像細川勝元の像ハ安置の内天井の画ハ東福寺兆殿司の筆也 画ハ明兆
方丈ハ勝元の館来院を移してつくる庭前の築山池の風色ハ勝元の
物数寄なり此地ハ衣笠の山ハ霞高く遠く囲て一陽来復より温
気めくる事早し池の面ハ水鳥むれありてまり去去の眺め殊に艶を
龍安寺の鴛鴦とて名高し

真如寺ハ衣笠の里松原村の西にあり
開基ハ夢窓国師本尊ハ釈迦仏光国師像 壇下に安置達磨仏国
夢窓の三祖 祀ハ無著尾といふ人これを結て三聯庵
といふ康永年中に高武蔵守師直修造すといへり



妙心寺
庫裏
方丈
法堂
仏殿
涅槃堂
鐘樓
山門


雙岡（ならびのおか）
新續古
松のみそ
ならひれ岳の
蔭なる
霧乃
月も
秋もしらぬ
入道一品
木辻

正法山妙心寺ハ諸安町の東本辻の西にあり開山ハ関山国師信州の人なり
はじめ洛に来り大灯国師に参りて衣鉢を附属せられ一夕関山の門に関の字を
舎壁に大書すとも門大師来りて之を爰かんで関山と號を後醍醐帝乃
同じく参ちなり其後も尊信なる事其後花園法皇禅苑として関山に住職を
なしぬ則法皇も方丈の後に一院をいとなみ住せ給ふ今の玉鳳院ハ是なり
佛殿の本尊釋迦佛 左迦葉 右阿難 達磨 臨濟 左右 脇壇の神牌 花園院 後花園院 後土御門院 後柏原院 後奈良院
法堂ハ北にあり経蔵ハ東にあり玉鳳院ハ正面に唐門あり額ハ法皇の
御宸筆なり

妙心寺十境 和漢禅刹次第出

萬歳山 仁和寺山
麒麟閣 玉鳳院内
度香橋 南門前
百花洞 玉鳳院内
宇多川 妙心寺の東流
鶏足嶺 小山
高安灘 東外川端
齊宮杜
南華塔 東寺塔
舊籍田 妙心寺の内 花園

雙岡ハ妙心寺の西にあり一二三之岡相並べり

風 いゑしくにならびの岡の神無月秋はさらぬぞゆきくれてみる 後宇多院

夫 はなし咲双の岡のまつかけに知るじ夕日のかげそふれろ 爲相

同 なきはぐ蝶のゆき声ひまもなしならびの岡の夜の日影 爲家

兼好法師の旧跡二の岡の西の麓にありと近世岡の東長泉寺にうつせり
ならびの岡に無常所まうけてかたはらに桜を植ゑさせて
ちぎりおきし花とならびの岡のべにあはれいくよの春をすぐさん 兼好

法金剛院ならびの丘にありむかし清原真人夏野の別荘なり其子右大臣雙丘寺
?雄公もならびの丘のうへに山荘をいとなみ後寺となして雙丘寺
と号けく已に荒癈に及ぶ其の所大治年中に待賢門院再興ありて號を
法金剛院とあらたむ宗旨ハ四宗兼学中興ハ圓覚上人なり
本尊ハ阿弥陀如来 丈六の像春日作とぞ
西光庵ハ双の池の上にあり浄土宗にして向阿上人開基なり



御室御門前之図

御室御所伽藍（おむろごしよがらん）



同来迎山八十八ヶ所順拝の図

毎歳二月十五日中九ッ時
御堂にて涅槃会あり
八十八番宝篋印塔八
石窟へ往仏の名仏を
と納めたるを称へ過去
帳にかきあらはして春秋の
彼岸中日と七月廿四日に
まて供養あり
十月十二日八十八番御堂を
おそひまんだら供あり
またれ祝唄をとりつけ
らるを報恩の御法会
なりと知るべし
法名を納めたるを称へ六
百門男女の名を記の
其所へ施主の名を連ね
納りし事を図に記す



御室御所ハ真言密宗の霊地にして御境内廣大なり。そもそも始めハ
光孝天皇の御願として仁和四年八月小松郷に於いて一院御草創
大内山仁和寺と號す。其後宇多天皇寛平九年七月皇太子
延喜帝に御位を譲りて同じ昌泰二年十月十四日御寳壽三十三歳
にて御出家ましまし御法諱空理寛平法皇と尊稱し奉る。先
帝の御願を継せ給ひ当山に七堂伽藍を建て御室と御造立ありし
て御入室ありしより御門跡の稱號ここに始まる。是より地名小松を改
め一處に御室と稱す。其頃御領七十万石余にして御寺中も
七十七ヶ院ありしに星霜推移るに随ひ其後諸国に兵乱蜂起
ありて御領も悉く寺廃に及び、然る中應仁二年兵起りて山名細川の
争ひとなる。其前年應仁元年山名の氏族洛の西に今の西陣陣営を構へんが
ため武家を放火ならしむるに、かく兵乱の折からなればこそ代々造営の御寺も悉く焼亡す
其の身命を活ん事をのみ嘆きたまへば誰か猶ら法務をも守らん余ハ
西の京まで廣がりて備りたるさしもの荘厳美麗を盡しつつひたる堂塔一時に
灰燼となりて後ち久しく荒廃におよび寺僧も所々に離散せしを
寛永年中に御再建ありまして舊に復しけるが御室様にも法皇より
宮御門跡方の上首にして其上總法務の勅任ましまして今に
宮中に於ても法親王門跡の内方に混ぜず総て御規模ましませり
よりなる故に他に御例なき春秋の勅會結縁灌頂毎歳三月
廿又日廿六日に御執行ある　御室御所　御室ハ仁和寺の総法務宮など称し奉る

金堂　本尊　弥陀仏座像三尺余　脇士　観音 勢至 立像四尺

観音堂　本尊　千手観音立像四尺余　脇士二十八部衆　立像各三尺

祖師堂　弘法大師　坐像三尺余　御自作　御壇　左に

寛平法皇　御寝殿　御木像三尺余　右壇に性信法親王　御影

法王大御室と尊称す

経蔵　中央　釈迦仏　左右　文殊　普賢　五重塔

九所明神　十一社権現　閼伽井　下乗の立札ハ藤原朝臣貞守の筆

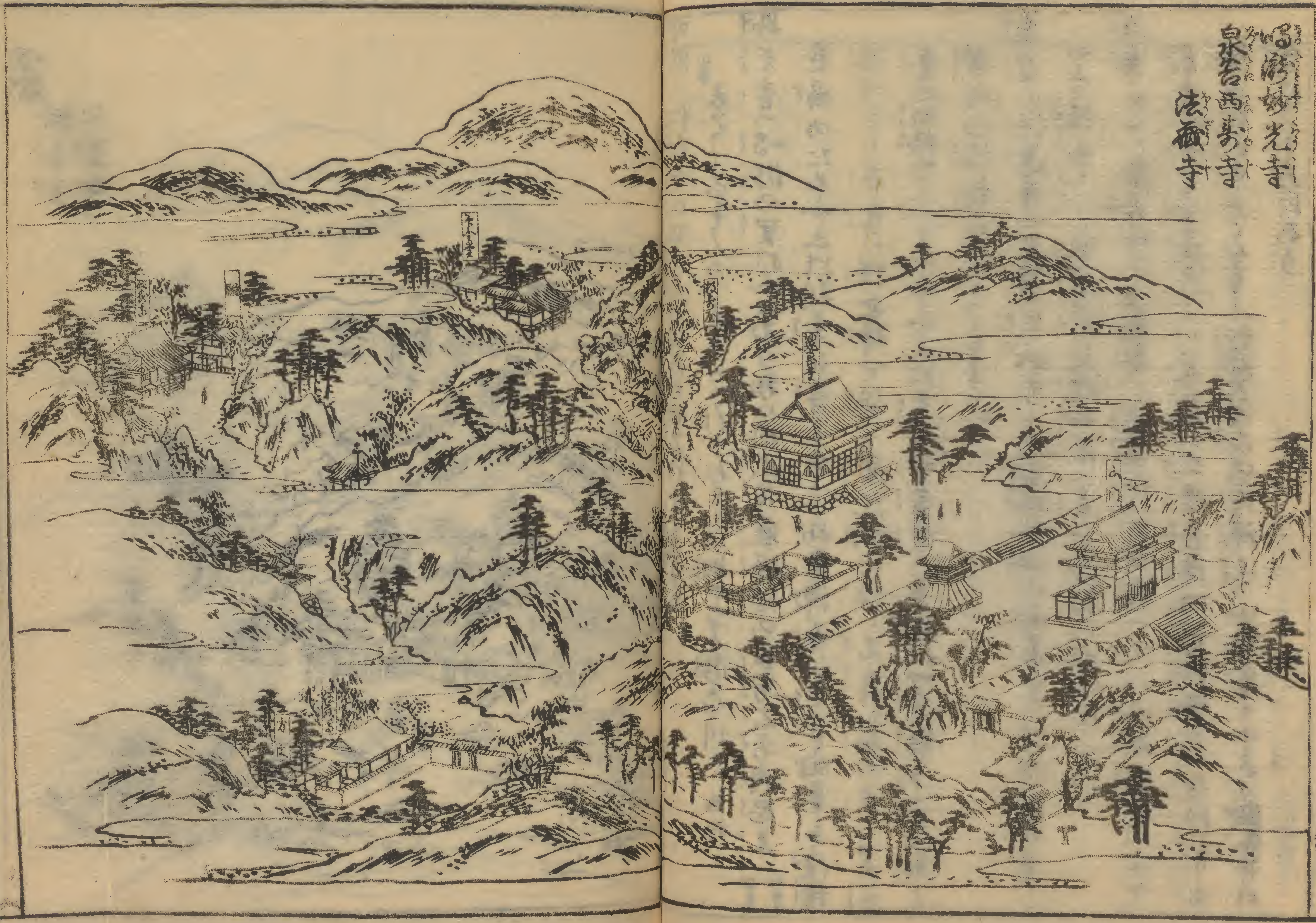
是當山を佳境として法音より櫻樹多く殊に山嶽近々迫りて
清き小嵐はげしく枝葉のまゝそおのづから梢富みず屈曲あり
擁さるゝがぬし故に弥生の花盛りハ都鄙の老若緇素春の錦を
着し色が枝く幕屏ひきえ農松が洞に於し甚白ろ眼ハ古瀧
を吸く西飛の白月と嶺を得んまハ青色の風景死き賞く日数
憐むと聞ふ倫なり又其續に東就山の林麓より一里余のわたりに四國
弘法大師遍路のため八十八ヶ所を近年御再建ありし永末まての御本
尊大師の自画なり加之金剛男信義男信者の様字一石に一字を
写し四方の廻りに建らまへれが此山内を別而勤の曼荼羅界と
いハその内に八十八ヶの小堂を廻り始めて此功徳を以て二世安楽の
結縁うさしめ給ひ御志ぬとのやまとを人々の信善にて同
峯ともも各者新しむ其景色一万みへず見しく順繹の尊者も繪畫
擬しよ誌じ見を致しめうる不浄地といふべきあり

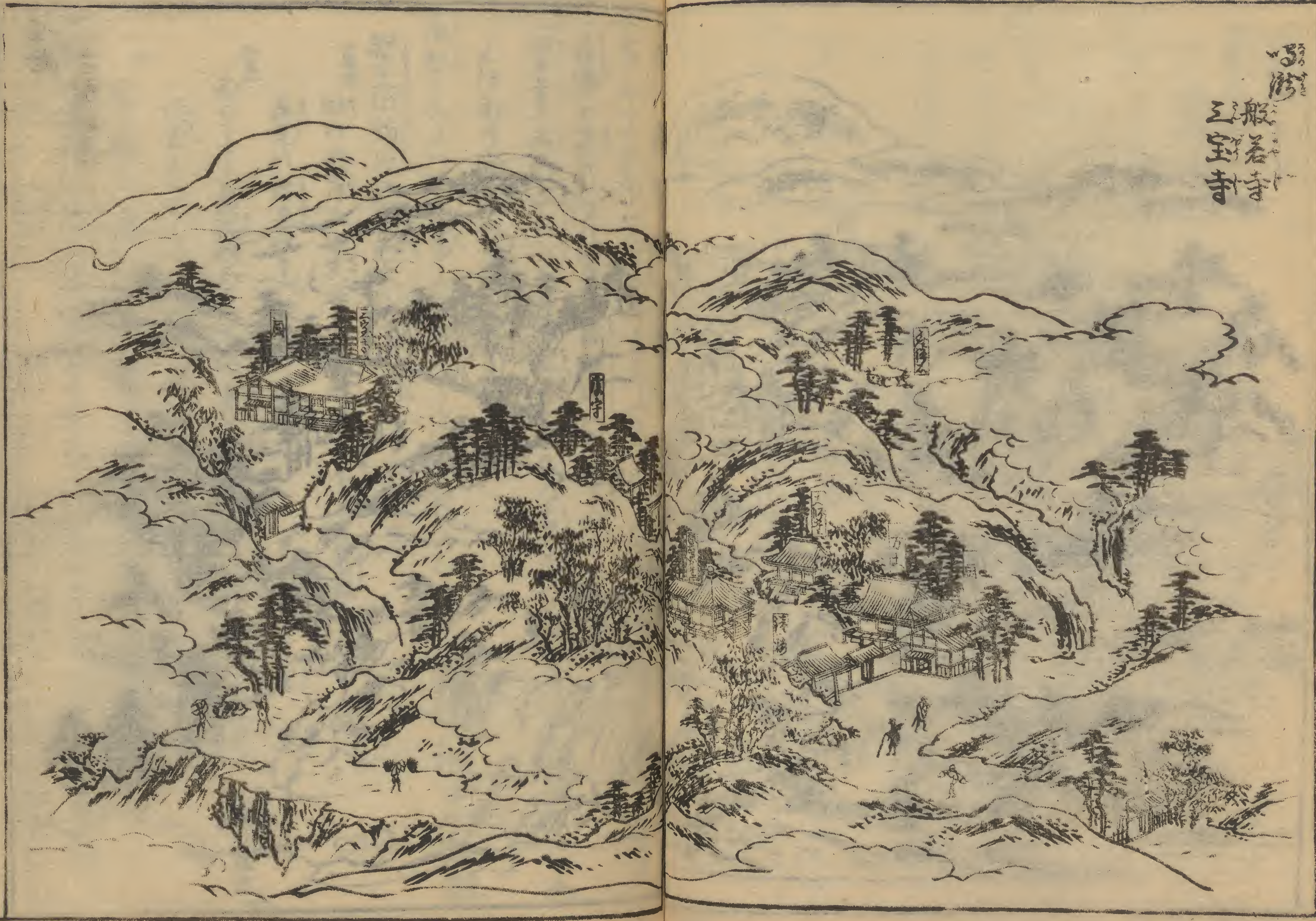
鳴瀧ハ仁和寺の西にありし此所ハ砥石の名產なり

山家　音にしもありとみにせられしそれハ涸やらる瀧乃川　西行

妙光寺ハ鳴瀧の里の北にあり（初名妙光）神ハ内大臣藤師継の長男右近将忠季
追福のため此山に別業の寺となし妙光禪寺と号を開基を法燈
國師なり本尊ハ釋迦佛を安ず寶陀閣の額ハ本唐和尚の筆之業書
臺の旧地ハうしろの山上にあり印金堂ハ堂内に四方鏡ある壁に押く
當所の荘観なりとぞ

泉谷の法藏寺ハ黄檗宗派にして百拙和尚の開基なり此所西寿寺と
いふハ浄土宗にて本尊ハ阿弥陀如来ハ恵心僧都の作なり
五臺山ふれハ般若寺あり開基ハ觀賢僧正本尊ハ文殊江戸淵朝臣なり
宗旨ハ真言古義にして本尊ハ文殊菩薩阿弥陀堂にハ弥陀観音
勢至の三尊を安ず觀賢僧正の座禅石ハ北の方なる山にあり閼伽井の
堂のうしろにあり


鳴滝妙光寺
泉谷西寿寺
法蔵寺


鳴瀧
般若寺
三宝寺

五智山ハ五智の如来たゝせ給ふ山上に石賊の五智并不動観音地蔵尊石仏をあんちせり皆単称法師のきざみ給ふ所なり
三寶寺ハ西の山上にありて日蓮宗なり本堂ハ南向にして釈迦をへ山上にあり開基ハ日護上人なり
泉殿といふハ妙光寺と般若寺との間にありむかし高野塔に御子覚性法親王此所に御室といとなミ住せ給ひたまへり

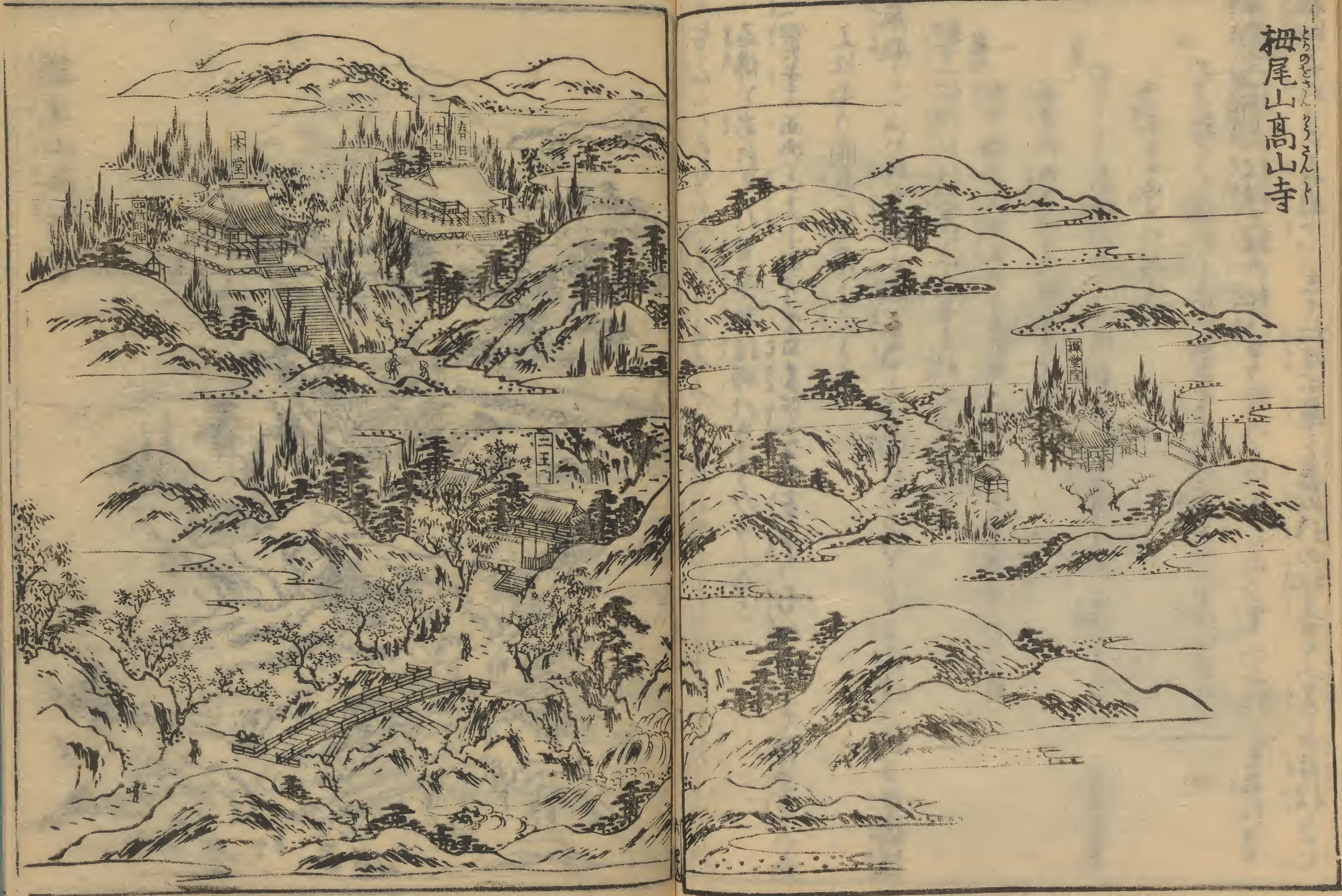
山槐記
　秋の彼岸の故実のために仏事すせんとして泉殿へまうわたりし
　長尾の松原にまうでてくらくして

御集
ありしよの松のみどりの常色にて憂身ぞ恨む残る月かな
　御前にまいりつきて

は
たちかへて消にしあとはきえさんにへ露にせん庭の苔かな　は
　守覚法親王

平岡八幡宮ハ弘法大師の勧請なりとぞ大石あり里人山神ともいふ
梅畑善妙寺ハ華厳宗にして梅尾に属す吉野神の社ハ世の人吉野の大君の社といふ


嵯峨 五智如来


栂尾山高山寺
とがのをさんかうさんじ
本堂
春日
住吉
四所明神
二王門
禅堂院


槙尾山西明寺
方丈
本堂
坊中



高雄山神護寺
江戸れ高雄も京の高雄も
浪速 國丸

栂尾山高山寺ハ華厳宗にして本尊ハ釈迦如来明恵上人の開基也紀州有田郡
の人なり九歳の時高雄山に上り文覚に従ひ倶舎頌をよみ密宗の灌頂をうけて離
華厳景雅にならひ文殊師利に帰し日々に九字咒を誦し十六羅漢を剃髪
東大寺の戒壇に於て受具し興然阿闍梨にまなび両部の密法をうけ
其後栂尾に経蔵首宗をとゞむ又和歌の道にも心深く自遺心集と云を書
哥を集む新勅撰にも上人の哥あまた入侍りぬ寛喜四年正月十九日寂にて
槇尾山平等心院ハ真言律にして開基ハ智泉法師なり本尊ハ釈迦如来
明恵上人の作り玉ふ千手観音ハ聖徳太子の作なりとそいへし

新後撰　たづねきて槇の尾山の花さかりまたその山の何の木末も　推経

高雄山神護寺ハ光仁帝の御宇和気の清麿奏聞し建立ありて勅額ハ
神護寺と號しぬ淳和帝の御宇天長二年に空海に賜ふ神護国祚真言寺
とあらため号して其比詔を下して金剛定寺の額を空海和尚にたまはしめんと
勅使をたてさせられけるに折ふし又月雨ふりて清滝川の水増りて高雄山にゆきて
止まりける勅使則川のかたはらにたゝずみて硯ひきよせひらきて空海和尚へ
わたして筆に墨をぬらしまゐらせ持たる額に向ひて筆をなげられけれハ墨おのづから飛て
額の面に忽ち金剛定寺の四字現る 意をとる 大師行状記
金堂の本尊薬師如来講堂の本尊ハ弘法大師の作 額書石 石面に窪あり硯石と号す 楼門の前にあり
額ハ仁和寺覚法法親王の御筆なり納涼坊にハ弘法大師の像并に文覚上人
の画像もあり鐘楼ハ金堂の艮にありて鐘の銘ハ菅原是善卿序の詞ハ
橘広相筆者ハ藤原敏行なり是を世に三絶と號す本朝の名器なり
してみごとなるもの也八幡宮ハ経蔵の巽にあり護法の社ハ和気
清麿の霊をまつるとなり
此所ハむかしより紅葉の名所也其奥の地蔵院より下なる渓をさくら渓といふ
立田の林の色をうばひ和歌に詠ぜられ名日のやうにあかしにつらなる錦を
さらすがごとし詩人も是を賞せられ停車坐看楓林晩と杜牧が詠ぜり

古今遷建曰帝都天子之居天子以四海為家豈有常處哉惟其所在卽以為都都者人之所都會云爾以衆大而言謂之京都周公相成王都洛邑諸侯藩屏四方朝明堂後漢李唐亦都洛陽歟

本朝聖主之例以京師稱洛陽歟抑平安者天下之中而有德無窮之都也従長岡之遷都已来歷千載而賢聖在位景星見於天由是庶民浴泰平之化予時遍覽四方山川之勝裁配畫工信繁令模之遷尋昔人之経蹟詳記其由縁全之名曰都名所圖會鳴呼聆左思

之博才蜀都賦歴年所況撰不渉年
寡聞浅識伊霄其耻後君子正遺漏
俟滌洗而已季秋十三夜於斑竹亭書
旹安永九年也

選者　平安　秋里湘夕

浪花畫工　春朝齋竹原信繁

京壬生村住
彫工　永島六右衛門

安永九年子中秋

書林
大阪心斎橋通唐物町
河内屋太助梓